時 報

No.10

1959. 8

大阪大学山岳会

時　　報　第10号　目　　次

遠　征　雑　感　　篠田軍治

1958年度　春山合宿報告

黒部川上ノ廊下積雪期初横断

1958年度　冬山合宿報告

涸沢岳西尾根より北穂高岳、奥穂高岳

平湯新人スキー合宿

1958年度　夏山剱合宿報告

ヒマルチュリだより　　住吉仙也

1958年度　一般山行報告

岩登りトレーニング報告

雑　　纂

会　員　名　簿（省略）

≪1958年4月より1959年3月までの記録≫

遠　征　雑　感

篠　田　軍　治

戦前海外遠征ということが我国登山会を賑わした。これは積雪期の山が内地では大体済んでしまったこと、社会状勢が遠征に好都合であったことなどがおもな原因であったように思われる。

戦後、再び海外遠征が盛んになって来たが、戦前と違って南米、南阿と云ったような戦前には簡単に行けなかったような遠い町まで足をのばすようになり、また戦前のヒマラヤの夢も今では夢でなくなってきた。戦前と戦後の大きな違いは、ヒマラヤその他の知識がふえたこと、装備が大きな進歩したことよりも航空機の発達による世界が狭くなったことが一番大きいと言われている。しかし現在ではこれよりもヒマラヤのジャイアントが大部分登頂されてしまったということではなかろうか。

エベレストが登頂されたとき、もう第三の極地は残っていないという、何か少し寂しいような気持とこれからのヒマラヤは昔、英国人がアルプスの開拓時代に毎夏海を渡って出掛けて行ったような形になるのではないか、言いかえればヒマラヤもいよいよスポーツアルピニズムの時代に入るのではないかという気がして心楽しいものがあった。

一昨年アメリカの登山家と会って色々と話し合った印象から言えば、一体にアメリカ人はヒマラヤにはあまり関心がない。アラスカや、ブリチッシュ・コロンビヤ（カナダ）あたりへはよく行くようであり、アラスカへはヘリコプターを使って食糧などを落すが、軍のヘリコプターをチャーターするのがなかなか高くつくとこぼしているのでアラスカよりもヒマラヤの方が安いではないかいうと、やはりアラスカの方が安いと言ってあまりヒマラヤへの関心を示す者はなかった。自分の会った範囲というのは限られた人数であるからこれをもってアメリカ岳人の一般的傾向とは言えないかも知れないが、少なくともヒマラヤはスポーツアルピニズムの対象になり難いというような考え方があるのではないかという印象を受けた。

今のアメリカ人は往年の英国人と似たところがある。夏休みになると大勢が海を渡ってヨーロッパへ出掛けるところなど、昔の英国人がドーバーを越えて大陸へ出掛けたのと同じだと言って差支えない。だから彼等にとって海外の山

へ出掛けるのは単なる旅行でしかない。ちょうど明治末期に日本アルプスへ出掛けるというと篠井線の明科で汽車を降り、大町に出て一泊、翌日濁とか大沢で一泊というのは時間的に言って、今では違った大陸へ行って山登りのベースまで行くのと時間的にあまり違いはない。その上、昔の日本アルプスのように一人で数人の人夫を連れて行くのでは、全くのキャラバンである。日本でも昔の日本アルプスではこんな形であったこと、しかも先人はこれを毎夏繰り返していたことを思うと、今のアメリカ人が、毎夏または毎クリスマス休暇毎に海外の山へ出掛けて行っても不思議はない。

夏はアラスカあたりへ、冬はアンデスや時によるとアフリカへ、日本ならばひとかどのエクスペディションであるが、アメリカ人は資金カンパするわけではなし、装備も会社の寄附を求めるものでもなし、あり合せの装備で出掛けて行く。こういうのがスポーツアルピニズムの眞の姿ではなかろうか。しかしこれも一生に一度というようなものでは面白くない。

こんな種類の山登りは今のヒマラヤではまだ一寸無理であろう。しかし、だんだんとこんな形になって行くべきものと考えてよいのでなかろうか。

一九五八年度春山合宿

黒部川上ノ廊下積雪期初横断

－59 年 3 月の記録－

1．ま え が き
2．行 動 概 要
3．アタック隊報告
4．食 料 報 告
5．アタック食糧
6．装 備 報 告

1．ま え が き

戦後阪大山岳部が再建された当時すでに篠田先生その他一部の人々が上廊下に目をつけていたのであるが、当時は主に後立山周辺に多く積雪期合宿が行われ、まだ稜線の行動に確信が持てなかったのでこの問題は長い間取上げられずにいた。

しかし積雪期の目標が後立連峰において稜線を行動しうる段階に入ってくるに従い、黒部川の横断に手をつけ、数多くの準備と失敗が積重ねられて遂に 31 年春宍戸、西川、岡田の三氏によって初めて鳴沢→内蔵之助平→立山と横断に成功し、これから次第に上廊下の方に焦点が移って来た。そして 31 年冬期、木村裕リーダー以下十数名が蒲田温泉－大野間沢－双六小屋－雲の平のコースをとって薬師岳アタックの計画を実行したが、運悪く延べ 2 週間以上にわたる吹雪のため失敗した。

さらに 2 年して、33 年冬期、岡田博司リーダー他 7 名が三俣小屋横にテントを出し、赤牛岳にアタックを試みた結果 6 名のアタック隊が 14 時間のアルバイトで無事成功し、黒部上廊下横断計画が次の目標としてはっきり浮彫されたのである。

しかし、これを実際に行う段になると数多くの解決せねばならない問題に直面せざるをえなかった。

一、黒部川上廊下は谷が非常に深く、その両岸は非常な急傾斜或は絶壁でこの登行は困難である。

二、積雪期の黒部に関するかぎり、大正 15 年の西堀氏等の記録ぐらいしかない。

三、陸測地図は不正確をきわめ、誤りが非常に多い。

四、高度 2200m 以下では猛烈なブッシュである。

五、アプローチが長いのでテントが最低 4 張必要であり、テントを新しく 2 張作らねばならないこと。

六、春は増水するのでスノーブリッジがかゝっているかどうか不明である。

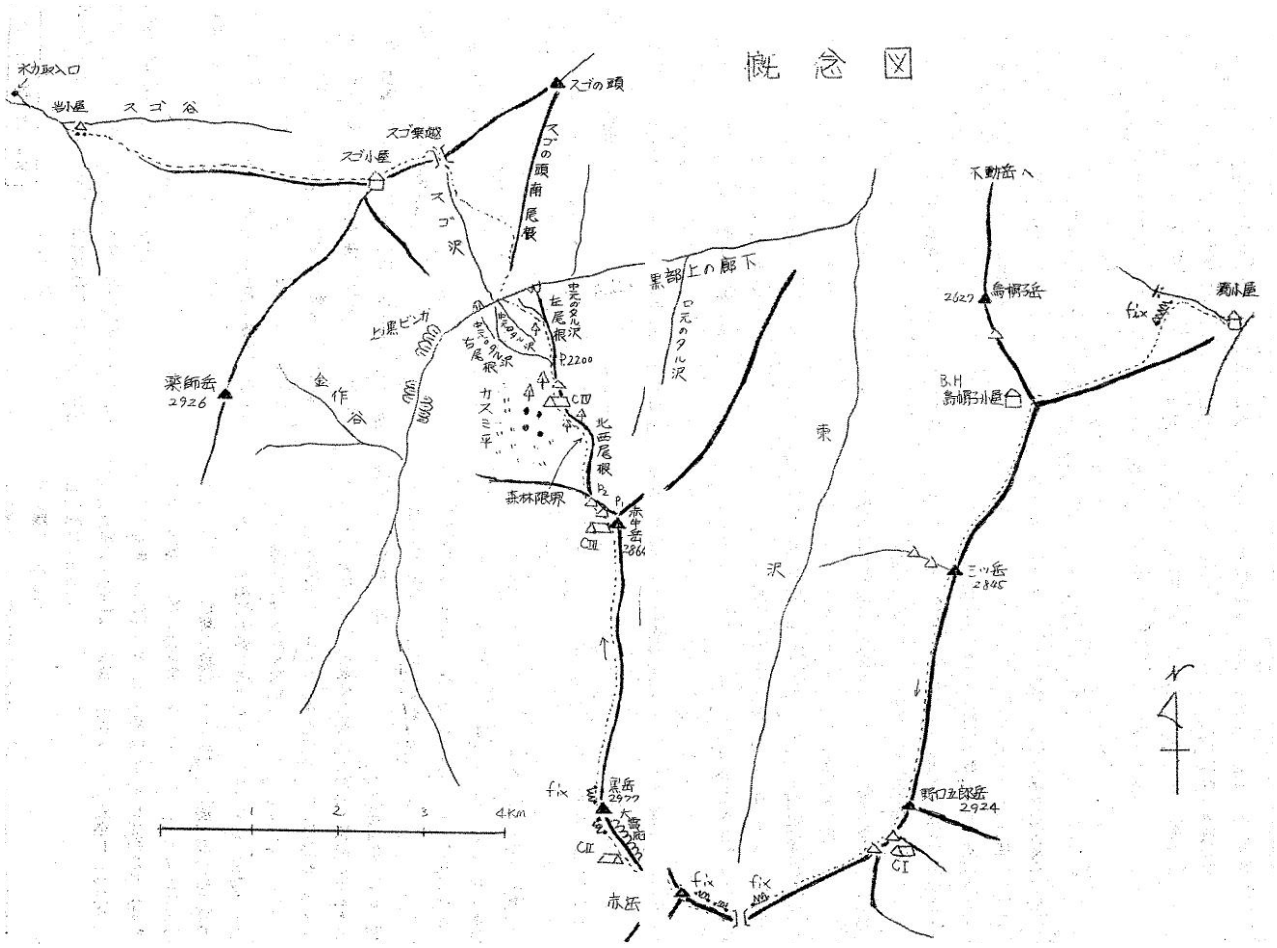
七、東沢東越附近及び黒岳周辺の難場をボッカ隊が事故を起こさずに通れるか否か。

八、最後に優秀なメンバーが 20 名以上必要である。

等である。第一・二・三の問題を解くために、33 年夏から延 4 パーティが赤牛岳の周辺に入った結果、11 月に野田、米林、山本、田村、佐藤のパーティが赤牛岳頂上より尾根を下って上廊下のスゴ沢出合に下り、ここで 50 米の渡渉をして対岸に渡りスゴ沢をつめてスゴ小屋にたどりついた。その結果ブッシュは非常に密であるが積雪期にはこれが完全に雪の下になるかも知れない事や、スノーブリッジが期待できない事、又スゴ沢には大きな滝が 2 つあるけれども春には雪崩のためにうまってしまうかも知れぬ。等の事がわかり、このルートが唯一つの可能なルートである事が、はっきりしたのである。

第五番目のテントの問題は 33 年 12 月に解決されたので、問題は如何にして円滑に赤牛岳まで荷物をボッカするかという事と新人に稜線で荷物を担がせて良いかという問題が残された。しかしこれはやってみるより仕方のない事であった。

実際の行動計画は別表を見てもわかると思うが、B.H を烏帽子小屋、CⅠを野口五郎岳、CⅡを赤岳と黒岳の中間、CⅢを赤牛岳、CⅣを赤牛岳北西尾根上 2200m のピークに出す。そして計画を 3 つの段階に分け、第 1 の段階では B.H に荷物と人員を集結する事、第 2 段で CⅡを建設しこれに CⅡCⅢCⅣアタック用の必要物資を集め新人を下



山させる。そして最後の段階で CⅣまでキャムプを延しアタックを行う段取りであった。

尚、偵察のための山行は次の通りである。

Ⅰ　薬師岳・金作谷　　8 月 11 日～19 日

Ⅱ　有峰－三俣－赤牛　　10 月 6 日～10 月 12 日

Ⅲ　スゴ沢より上ノ廊下偵察　　10 月 8 日～10 月 11 日

Ⅳ　赤牛岳よりスゴ沢へ　　11 月 3 日～11 月 7 日

２．行 動 概 要

合宿用団体装備及び食糧のうち 400kg を秋の荷上げにより烏帽子に入れてあったので春には残りの半分 360kg を荷上げせねばならない。個人装備は全員 15kg 以下である。

期間　3 月 10 日～4 月 2 日

メンバー　OB 広橋（アタック）、3 年生　CL 山本、兼清、野田（マネージャー）、米林（アタック）、平田、木村、2 年生　大島（装）、田井、大工原食、玉井食、笠松食、田村食医、保母、谷垣、中村、錦田、村井、佐藤包、広瀬装、1 年生　西垣、酒井、高橋、打出、長谷川、佐藤、五百蔵、前沢、黒木、金子、白井、宇野、丸尾 2 年

行動記録

3 月 11 日　平田、野田、佐藤茂、五百蔵、高橋、前沢の 6 名濁小屋に入る。

12 日（晴）　6 名全員 28kg づつかついで 7.20 濁小屋出発。途中尾根の取付に 60m、尾根途中に 1 ヶ所ザイルフィックスを行いながら登り、16.05 烏帽子小屋着。荷物が多すぎたので濁小屋へ少し残して行った。

13 日（風雪）　停滞

14 日（晴強風）　野田、五百蔵、前沢は 7.00 出発し三つ岳まで行ったが強風のため歩けないので荷物をデポして引返す。

平田、高橋、佐藤は濁小屋に残った荷を逆ボッカするため、6.45 出発。10.45 濁小屋着、18.00 烏帽子 B.H 着。濁からの登りは風が強く、非常に消耗したのでナイフリッジ上に荷物をデポして小屋へ逃げる。本隊大阪発。

15 日（晴）　3 名ナイフリッジの荷物を B.H へはこび込む。9.00 6 名にてＣＩを建設せんと出発するが 10.30 三ツ岳にて平田が不調になり、野口五郎まで入れそうにないので高橋と引返し、残り 4 名で三ツ岳風下側に雪洞を掘った。

先発及び米林、兼清、広橋、田村を除く 21 名の本隊は 43～47kg の荷をかついで濁小屋へ到着す。14.30～15.30。木村、大島を取付の偵察に出し、残りの者は夕刻まで翌日の荷物のふり分けを行い、パッキングを完了す。

16 日（快晴）　平田、高橋は前日ハンマーを忘れて行ったので三ツ岳まで渡しに行く。デポ地雪洞内の 4 名は、9.10 出発し、14.00 野口五郎岳の次のピークの風下側に雪洞地点を決定した。ここに雪洞を掘りテントは張らなかった。

一方本隊は、6.10 濁小屋を出発し、2.30 烏帽子小屋着。山本、大島、笠松、玉井は梱包と荷物整理のために B.H に泊る。B.H にて平田、高橋と計 6 名で荷物を石油缶につめ始め、CⅣとアタック食を整理する。

17 日（雪、気温高くガス濃し）　ＣＩから佐藤、野田が偵察に出たが、東沢乗越手前にて悪天のため引きかえす。B.H では梱包を続行し、夕刻完了。濁小屋では黒木、丸尾以外 17 名が黒部第 5 発電所まで往復、7.46 発、10.10 帰る。

18 日（晴）　野田、佐藤ＣＩ8.45 発、11.10 東沢乗越着、15.00 フィックス終了、16.50 テント着。

東沢乗越までは尾根上は雪が深く積って岩が隠れているので悪場はない。しかし新雪が 10cm 程積っているので、古いクラストした雪とのなじみが悪い。東沢乗越の登りに 50 米、その上の岩場に 20 米のフィックス。さらに赤岳との間に 2 ヶ所フィックスを行う。

B.H より山本、玉井、大島、高橋は ＣＩへ各自 18kg ずつ荷上げを行う。6.30 発、11.30CＩ着、15.00B.H。

濁から 19 名は各自 20kg づつかついで烏帽子へ入った。6.30 発、14.00B.H 着。

19 日（快晴）　ＣＩでは全員晴天停滞。CⅡまでのフィックスが完了したし、皆連日の行動で相当疲れていたので休日とする。

B.H より山本、広瀬、村井、大工原、田井、玉井、谷垣、高橋、打出、保母がＣＩに入り、他の 11 名がこれをサポートした。午後は B.H からＣＩに新しく入ったもので、既設の雪洞の左右に新しく雪洞を完成し、合せて 15 名の露営が可能となった。

B.H6.45 出発、11.30CＩ着、12.30 サポート隊発、15.00B.H 着。

20 日（雪、風強し）　ＣＩ停滞。

B.H 広橋、米林が入って活気ずいた。B.H では少々の雪をはねかえさんものとばかりに荷上げを強行したが三つ岳まで至り強風のために断念し荷物をデポして引返した。
21 日（晴）　野田、村井、広瀬、佐藤及びこれをサポートする 10 名はCⅡ建設のために 8.05CⅠ出発、9.10 東沢乗越、11.00 赤岳黒岳間のテラス上にキャンプサイトを決定する。13.00 サポート隊帰る。15.30CⅠ着。CⅡに入った 4 名及びサポート 10 名はそれぞれ 18kg ずつかついだので団体装備 200kg を CⅡに入れる事が出来た。CⅡにテントを張っている間に野田、村井は黒岳のフィックスに出かけ、16.00 テントへ帰る。

B.H からは ＣⅠへボッカが入る。長谷川が ＣⅠへ入った。このボッカによって B.H から ＣⅠへの荷上げが全部終了す。

先発隊が最初に作った雪洞は天上が沈降して来て床から天井まで 60cm ぐらいになり、水がポタポタ落ちてとても使えなくなって放棄した。
22 日（風雪）　停滞。

朝になってみると雪洞の入口が完全に埋ってしまって朝というのに夜中と変わらない。雪洞入口の掘出に半日をつぶした。

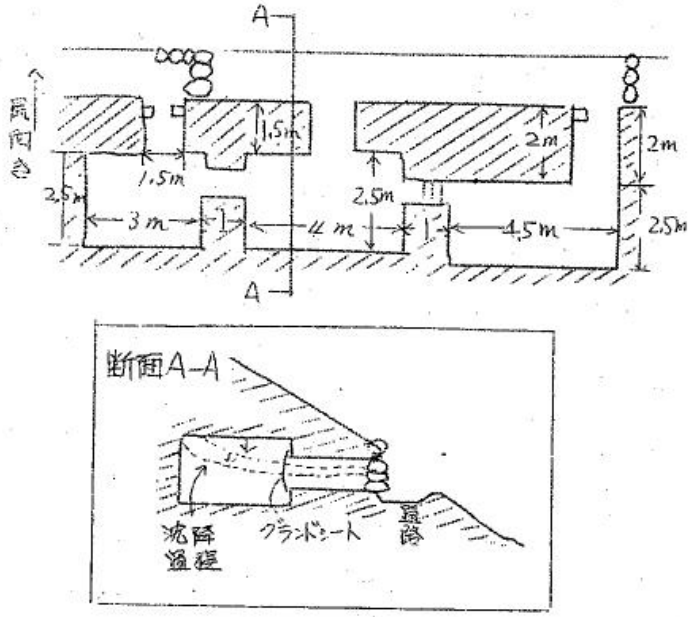
五百蔵が右脇腹が痛むといって昨晩は一睡もしていないというので盲腸ではないかと心配したが、盲腸でもないようである。早く B.H と連絡をとりたいと思うが天気が回復しないので連絡を出す事が出来ない。ＣⅠ、CⅡ、B.H とも停滞。
23 日（風雪）　五百蔵は食欲を取りもどし痛みも少し軽くなったが、とても歩けない、B.H、ＣⅠ、CⅡ停滞、大島は痔がひどくなって薬もきかない。
24 日（小雪）　23 日夕刻から天気は回復しはじめたので 21.00 保母、大工原は連絡のために雪洞を出たが、21.30 強風のため危険を感じて引きかえしてきた。それから一眠りして 24 日 1.00 眼がさめてみると雪洞内が月明りでうす明るい。風もおさまったので保母、大工原を起して B.H からの応援を求めるべく連絡に行ってもらう。B.H4.30 着。

B.H では連絡を受けるとすぐ電報を打たせるため丸尾を下山させ、すぐ続いて木村と他 2 名がショイコ、タンカをとりに葛温泉へ行く。田村、西垣、白井、中村、酒井、佐藤（毅）、金子が五百蔵を ＣⅠに下した。五百蔵は歩いて帰った。米林、広橋、平田の 3 名が新たに ＣⅠに入って ＣⅠにてボッカ計画表を再検討した。保母、大工原が学校の進学手続きで是非下山したいというので稜線メンバーが不足し、仕方なく新人高橋、打出、谷垣を起用する事に決定し平田は調子が良くなれば CⅡ或は CⅢに入ってもらう事にした。

CⅡでは野田、佐藤、村井、広瀬の 4 名が赤牛岳に CⅢを建設す。CⅡ8.30.

赤牛手前 12.00、CⅡの既設テントｈそのままにして、新テントを CⅢに持って行ったが悪天で予定地まで行けずに赤牛手前に雪洞を掘って入る。

25 日（快晴）　B.H→CⅡ田村、兼清 CⅠにて各々9kg の荷を追加して CⅡに入る。



CⅠ→CⅡ広橋、米林、田井、谷垣、打出、高橋の計 8 名が入る。CⅠ　CⅡ山本、平田、大工原、玉井、保母、B.H CⅠ　CⅡ長谷川、前沢、タイム。8.00CⅠ発、9.15 東沢乗越、10.50CⅡ食事をとる。11.45 帰り発、13.50CⅠ着。

前日、五百蔵を下し、広橋、米林が入って計画をたてなおしたあとの快晴で、意気ようようとボッカに出発した。サポート隊は 22～24kg の荷をかつぎ CⅡに入り残りのものは 8～10kg の荷をかついで上ったが新雪も少なく快適に進んだ。

サポート隊は CⅠへ帰ったのが早かったので夕暮まで雪洞を快適なように改造したり干物をする。

26 日（ガス）　CⅠでは午前中視界わずか 100m 足らずで風が出れば危ない天気である。昼頃まで様子を見ていたが、風が出て来ないので 11.30 出発準備を始めた。平田の調子が相変らず良くないので一人 CⅠに残ってもらい、14.45 出発、視界が悪いので 100m おきに竿を立てて行くが稜線を歩いていても雪庇の輪郭さえ見えなくなったので、晴れるのを待つ事 1 時間半。16.30 再び出発、17.07 東沢乗越、東沢乗越をすぎてから又ガスが濃くなってくる。かまわずこれをつきぬけて赤岳の上につく頃、夕焼の真紅がガスを染めて、我が家についたようにほっとした。西の空は雲海が低く水平線を作り赤岳には星がきらめく。18.30CⅡ着。山本と一緒に来た 3 名は天候が悪化したため CⅠへ帰るのを中止し、二つのテントに分かれて入る。2 個のシュラーフをつないで 3 人入り、V2 テントに 7 名、V1 テントに 5 名寝たが全く窮屈な一夜だった。

27 日（快晴）　目ざまし時計が 4.00 ヂリヂリと鳴った時は全くうらめしかった。4.00 起床、玉井、大工原、保母 6.15CⅠへ帰るため出発、CⅡの 9 名は CⅢへ入る、広橋、米林は個人装備の上に 8kg、又サポートの 7 名は 20kg の装備食糧を持ち、7.00 出発。黒岳のフィックスの上に新雪が 20cm 程積っている。

黒岳で京大のパーティー9 名が軽装で追いついて来てザイルフィックスの所で彼らに先に行ってもらった。

黒岳周辺から赤牛までの稜線は一昨年、昨年の冬や秋に比べるとずっと雪が多い。特に黒岳の周辺はずっと尾根通しにトレースが出来たので時間が大いに短縮できた。黒岳の下りの大斜面はテカテカに凍りついていて新雪もほとんど乗っていない。ここに野田は 50m のフィックスを設けていた。黒岳から赤牛まで晴れれば問題のない尾根だ。11.10CⅢ着、12.25 サポート発、15.20CⅡ着、CⅢは赤牛岳頂上から北西尾根を 50m 下った所に建設してあった。

CⅢからは同日、野田、広瀬が CⅣ予定地のピーク 2200 まで 1 時間で下り、約 2 時間の登りで CⅢに帰った。

CⅢ　野田、広瀬、村井、佐藤、広橋、米林

CⅡ　山本、田村、兼清、田井、打出、谷垣、高橋（全員 CⅢまでサポート）

CⅠ　撤収、B.H　平田、玉井、保母、大工原、笠松

28 日（曇後快晴）　B.H 撤収す。

CⅡ隊 8.10 発、10.55CⅢ着、サポート隊 14.30CⅡ着。

明け方は風が強かったが 8 時頃には風が止み、CⅡ、CⅢ間 2 時間 45 分の新記録をたてた。CⅢで北側急斜面に雪洞を掘りながらふと下を見ると CⅣの黄色いテントが点のように見えるではないか。まだ正午を少し過ぎたばかりだ。馬鹿に早い、田村、打出、田井は食後 CⅡへ引返した。

テント設営がすみ、雪洞が完成する頃 P2 の上に 3 人の黒い影が見えはじめた。雲が去って快晴となる。CⅢ隊 8.00 出発、米林、佐藤、村井の偵察隊兼サポート隊は広橋、野田、広瀬にサポートされて CⅣをピーク 2200（通称赤牛台地）に CⅣを出した。その結果予想に反し雪の状態も好く CⅣまではアイゼンのままで行ける見通しがついた。山本、広橋、兼清、野田、広瀬がテントに入り谷垣、高橋は雪洞に入る。

29 日（曇強風）　CⅣ偵察隊米林、村井、佐藤は河原まで下りて橋をかけた。

CⅣ隊　4.00 起、8.20 出発、9.25CⅣ着、食事、10.15 出発、12.15CⅢ着。

森林帯から下の心配していたブッシュはすっかり雪の下になり尾根の形がはっきりしているので視界さえよければまずまずまちがえる事はない。このあたりまで下ると雪がべとつき、それまではクラストしていてアイゼンがよくきいていた雪が、アイゼンの下に 10cm も雪が団子になる様な湿雪に変って全く始末が悪い。しかし気温は高いから風が強いにもかかわらず手袋がなくても大して冷たく感じない。

CⅢの者は食料の余裕が出来たので入山以来始めての満腹感を味わった。合宿の成功を祈りつゝ8.00 寝る。

30 日（風雨強し）　CⅡCⅢCⅣ停滞。29 日夜シュラーフに入ってからだんだん風が強くなり、テントをパラパラと打つ音が聞え始め夜半に入って猛烈な風がテントをひきちぎらんばかりに横なぐりに吹いて、今にも裂けはせぬかと思われる程だ。朝起きてみると足元のひくくなっている方が一面の水たまりでシュラーフとキスリングを取去ってみると、深さ 10cm たらずの池になっている。すぐに他の 3 名を起してシュラーフをまるめ濡れては困るものを全部かたずけた。食後窮余の一策としてグランドシートを 10cm ばかり T 字型に裂いたら 2・3 分の間に水は消えた。終日雨又はみぞれが降り風が強かった。

赤牛の CⅢは雪庇の発達状態や吹きだまりの様子から風が南西から吹くと判断して頂上の西側にテントを南北に張ったが、風は西から吹きあげてきたので真横にうける事になった。今後ここへテントを張る者は注意すべきである。CⅡ、CⅣのメンバーも難儀している事だろう。

31 日（晴風弱し）　CⅡ田村、打出が鷲羽岳まで往復す。CⅢ停滞、CⅣアタック出発。

CⅢにて。テントのベンチレーターから見える空の色が青に変った。思いは CⅣに走りアタックはどうしているかと心配される。終日テントの雪かきや干物をしたり食料、装備の整理をする。

夕食が終ると気がそわそわし出す。29 日に CⅣの者と決めて来た 7.00、7.30、8.00 のアタックと連絡時刻がせまってくる。連絡は先づ 7.00 にアタックは連続 5 分間、懐中電灯で信号を発し、それを CⅢ、CⅣで確認すればただちに 5 分間連続点灯する事になっている。しかし昨日の天気の事を考えると雪崩を避けて今晩スゴ沢を上る見込みが大きいからおそらくまだ灯は見えないだろう。6.50 各自ヘッドランプの明るさを確かめに外に飛び出す。雲海がぐっと低く、日本海から西北へ水平線を作り空との境目あたりがまた夕日の赤みを残して赤く薬師岳が黒々と前に立ちはだかり鋭い輪郭がその黒さを目に焼きつける。右下には黒部第 4 発電所の照明灯がはっきりしている。3 分前風がようやく身にしみて寒くなり出し首筋がぞくぞくする。

しかしよく見るとスゴ沢の所だけうっすらと白くガスがかかっているのが見える。残念なるかな、これではうまくいかぬかも知れぬ。目の錯覚であろうか、スゴの頭へ続く尾根の中間に何かちらちらと見える様な気がする。7 時 1 分前（私の時計で）見よスゴの乗越のあたりに今までなかった灯が見える。非常に明るい、富山の町の灯ではないか、いや、確かにアタックの連中だ。夢中で電灯をつけスゴのコルの方へむけ

る。灯りはじっとして動かない。1 分過ぎに CⅣからの明りがこちらにみえた。まずは成功だ。夢のような気がする。CⅣとアタックの明りが一直線上に見え CⅣの明りが何かを言っているように思われる。四人抱き合うようにして互いに手を握り歓声をあげてしばらくしてコルの灯が消えてからテントに入った。

4 月 1 日　エイプリルフール（晴無風）

CⅣ12.00 撤収、CⅢ15.30～食事　16.00、CⅡ帰着 7.00

アタックの後の虚脱感があるのみ。雨の後であったが温度が下がったので雪は固かった。10.00CⅡの三名が連絡のために CⅢ到着、CⅣの連中が帰ってくるのを待っていたが、14.00 になっても現れないので高橋、広瀬と共に先に帰らした。山本、谷垣が迎えに P2 まで下った所で CⅣから兼清、村井、佐藤が重い荷にあえぎながら上ってきた。CⅢについた時は午後 3 時をすぎていたが天気が好いので CⅡまでがんばった。

4 月 2 日（晴）　9.00 出発、烏帽子 B.H16.00、濁小屋 21.00

フィックスザイルをはがしながら B.H へ帰った。B.H には十人用食料 3 回分が缶につめて残されてあったのは全く嬉しかった。しかし翌日の天候が不安であったので最後のがんばりを続け、濁についた時はフラフラであった。

後　　記

合宿は結果から云えば成功した。又大体予定通りの行動がとれた事は幸運であった。アタックが出るまでは成否は五分五分であると思われたが、唯の一回の試みによってうまく行ったのは“あっけない”という言葉があてはまるかも知れない。それは明らかに良い条件がそろっていたためであろう。しかし少し反省してみる事がある。

先発隊は計画表によれば本隊が追いつくまでに CⅡを建設し終っている事になっているが実際には先発隊の装備が予想以上に多く、B.H に入るために 3 日もかかり、おまけに平田が身体の調子を悪くしたので計画通り行動出来ず、その精神的負担は大きかったようだ。出来ればもう少し荷物を軽くする様に注意するとか、絶対確実の範囲内で行動出来る様に精神的余裕を持てる様にすべきであった。

行動計画では第一段階では尾根にも難しい所がないからというので停滞日を少く見積もっていたが、予想以上に天気が悪く B.H の食料は不足を極めた。それに反し CⅡ、CⅢ、CⅣでは食料が半分以上余り、持って帰れないものを少なからず放棄したのである。従って全体として前半は食料が不足し後半では余ったのであるが春の合宿では日がたつにつれて天候がよくなる事を考慮すれば合宿の停滞の取り方はほぼ一定で良い様である。

隊員については、はっきり云って非常に残念でならなかった。というのは特に 2 年生の中堅部員が身体の調子の不調や進学手続その他によって 5 名もの多くの者が CⅡから先に入らなかったのである。それ故合宿を継続するためにはどうしても新人を登用せねばならなくなり、隊員の安全という点で大きなマイナスとなった事は動かせないのである。

以上気のついた点のみについて述べたが、合宿がうまく行ったのは合宿に隊員全員が眞面目に取りくんだことが最も大きな力となったのだと思っている。

（山本信樹）

今度の計画において最も問題となるところは、烏帽子より赤牛に至る長い稜線上にポーラーを展開することと、黒部川の横断であった。後者について述べると、我々は積雪期のスゴ沢出合周辺の状態を全く知らなかったので大阪において再三検討したが、大体デブリによるスノーブリッジがかかっているものと予想していた訳である。しかし 3 月 28 日 CⅣを建設した時にこの予想は殆ど当っていないことがわかった。勿論 CⅣから出合は見えないがスゴ沢の F1F2 ははっきりと出ているし F2 以下は雪の落ちている所が非常に多かった。しかし秋に渡渉した者達の胸には水量さえ多くなければ、例えスノーブリッジがなくとも渡渉しうるという自信があった。そして 29 日の偵察を待った訳である。

3 月 29 日（曇）偵察隊（米林、佐藤、村井）三名は、朝七時 CⅣ出発。昨日大体、見当をつけておいた様に最初はスゴ沢よりずっと右より、廊下沢方面に尾根を下る。秋のひどいブッシュは全く埋まりモミの木間をどんどん下る。しかし秋にも迷った様にこの最後の尾根は非常に複雑で一度左の尾根へそれた。旗を沢山つけてアタックに備える。九時出合着、黒部川は少しも埋まっておらず、秋と同様にごうごうと流れている全く悲観したがとにかく橋をかけて最善をつくすことにし、大きなカンバの木を三･四本切り倒し右岸の深みに架橋する。その後試みに村井佐藤に渡渉してもらった。すると大体足首から膝位の水深でこれなら十分渡渉出来ると見極めて、更に橋を縄で固定して CⅣへと帰った。この際対岸を偵察するとスゴ沢下流（出合から F1 迄しか見えぬ。）は F1 が完全に出ているので、この乗越が難かしく、又 F1F2 間も両岸からの雪崩の危険が考えられるので、非常に苦しいであろうがスゴの頭への急な尾根（スゴノ頭南尾根）を三・四百米登りそれからトラバースしてスゴ沢どおしにスゴのコルへ達するのがよいだろうとの見通しを得た。ところが 29 日夜から 30 日丸一日非常な豪

雨となったので、川の増水が予想され、渡渉に一切をたくした我々にとって非常な危機となったのであった。　　（米林）

　メンバー、野田、米林、広橋 OB

3 月 31 日（快晴）　11.30 CⅣ発、12.20 黒部川、渡渉の後昼食、15.20 出発、19.10 スゴ乗越、19.30 出発、20.30 立命大の雪洞（泊）

　早朝テントの外をみるとガス、前日の雨に引きつづいて停滞かと懸念いていると、7 時頃晴れる。天気図から判断してもここ二日ほどは晴れるにちがいないというので、川岸にキャンプするという当初の計画を変更して一挙にスゴ乗越に登ることにする。偵察の結果から考えてみて、大体 8 ないし 10 時間で乗越に出られるとの見通しをたてる。但し、前日の雨で相当に増水している恐れもあり、実際スゴ沢の F1、F2 はかなり水量の増しているのが望遠鏡でも分る。

　雨水の凍りついた装備を干した後、CⅣを後にし、途中までワッパとアイゼン、後、アイゼンだけで下る。雪の表面だけが凍ってその下は半ばくさっている。傾斜は相当きつい。

　黒部川の水量は心配した程増えてはいないが、川幅が 50 メートル以上拡がっており、偵察隊が中州までかけた木橋も流失している。水深は深いところで約 70cm である。流れは相当に早いが、大したこともなく全員渡渉を終え、慌ただしい記念撮影の後、兼清、佐藤、村井のサポート隊は対岸に引返し、別々に昼食をとる。

　午後三時二〇分サポート隊に見送られてスゴの頭への急な尾根を登る。下部は木の根が露出し、枝にストックやポールがひっかかって、九日分の荷物は大いにこたえる。しかし、高度をかせぐのもまた早く標高二千メートルあたりからトラバースに移る。すでに雪もしまりはじめスゴ沢の側面から雪崩の危険は去ったようであるが斜面はかなり急であるので急いでトラバースを終えて広くひらけたスゴ沢の上部に出、ヘッドランプをつける。

　スゴ乗越直下で七時、連絡の時間である。成功の合図の灯を赤牛岳の方に向ける。とすぐ、CⅣに灯がともり、つづいて赤牛岳の頂上の CⅢにも応答の灯がつく。薄暮の中に沈もうとしている赤牛岳のシルエットの頂上と中腹に、二つの灯が明るい星のように輝いて思わず「バンザーイ」「ヤッタゾー」と大声をあげるがもとより聞こえるはずもない。

　乗越に出た頃から濃いガスが出て、7.30 の連絡はとれない。尾根の方向を誤らぬよう、地図と磁石で慎重にスゴ小屋へと向かう。途中立命大の雪洞を発見、勧められて

泊る。アイゼンバンドが凍りついて仲々とれない。立命大は 9 人で劔→槍往復の計画だそうである。

4 月 1 日（晴れたり曇ったり）　10.20 出発、10.45 スゴ尾根ジャンクション、14.10 尾根末端、16.50 北電取入口（泊）

成功の満足感をおぼえつつ稜線をたどる。スゴ小屋は全く雪に埋もれて、その位置さえもわからない。広橋 OB の休暇の都合で薬師岳登頂を止めて、下山する。赤牛岳に別れを惜しんで快適なモミの林の中を下る。薄くガスがかかって時々小雪がちらつく。尾根の下部では雪の状態が非常に悪く、幾度か引っくり返る。残った荷物がいまいましい。スゴ谷支流の渡渉は問題なかったが、火薬庫のコルへ登る斜面はひどく急な上、雪がくさっていてトップの広橋 OB は大いに苦しめられる。このコルから先はもう発電所のトンネル工事が始まっていてにぎやかである。取入口で久しぶりの畳、風呂、蒲団、それに電気。

4 月 2 日（快晴）　9.05 取入口発、12.55 千寿ケ原駅着

快晴の空に薬師岳の登頂が出来なかったのをくやみつつ、殆んど雪の消えた軌道を下る。今年はこのあたりでは例年より一ヶ月ほど雪融けが早いそうである。千寿ケ原の附近ではすでに桜の花が咲いていた。　（野田）

4．食糧報告

部にとって長年の目標である黒部上廊下横断が達成された今この一年間を食糧計画の面から見なおしてみる事も、必要な事に思われます。先輩諸兄の批判をえ、又今春より 2 年部員になられる諸君の参考になれば幸いと思います。

一つの計画が行われる場合、「行動予定表」と「食糧計画」については、食糧一人一日分の重量を 1.2kg 迄におさえる事を考えて（出来れば梱包重量も含んで）行動予定表が決定されるべきです。これにより初めて各キャムプに必要な総量が算出でき、献立表と結びついて具体的に「何がいくら」必要であるかがわかるのである。計画作成の際担当者間の連絡が不充分で、食糧計画が常にその犠牲にされて、出発間ぎわ迄どたばたしなければならないというのが現状である。事実この為に大変な誤りをおかしていた事を、現地につく迄気付かなかったという有様であった。

以下各項目毎に、今回の報告と今後への問題点をかいてみます。

A〔献立内容について〕　1人一日食1.1kg 160円を一応の目安とした。計画上は、C2以下行動日165円、C3C4は行動日175円となった。停滞日はこれより25円近く安い130円前後である。

(a) 費用の事には、冬山の反動と登山計画に対する部員の意気込みとによって抵抗は少なかった。今回は各部員の滞山日数が非常に多様であったから、数種のグループに組分けして合宿費を集めたのであるが、徴集法に於ける問題点は、部としての行動という名のもとに、下の者が上の者の分を一部負担した事である。これは部費から出すべきものであったと考える。

(b) 重量は容器の重さ（例コンソメチュ―ブ）も含めて1.2kg少し越える程度であった。

(c) 熱量、栄養面に関しては山日記の数値を用いた。つまり、表に示すような献立の下に「魚缶鯨肉目刺ソーセージ、計 250g 従って蛋白質は大体足りるだろう」という程度の計算を、後から行ったのである。この表の数量自体は、費用制限とこれ迄の経験とによるものであって、それ以上の意味は持ってはいない。山日記に主張されている朝昼夕食の比を1対1.5対1.5にせよとの意見は、朝の炊事に時間を食わぬ、現実に行動中腹がへり出すとバテル、の二点からとり入れたつもりである。

次に具体的にみていく。

(d) 朝食　主食をパン、ソバのどちらにするかは意見の分れた所である。但し実際にテントに入ってからは、あまりこの差は問題にされなかった様だ。積雪期のテントでは、水作りが炊事時間をきめるのではないだろうか。スープを紅茶（砂糖湯）で代えると、安価につき又出発時間も早められるのではないかと思われるが、必要な栄養や熱量がとれぬと判断した。

全般に「油（バター）が多すぎる」という者もあるが、これは熱量源として更に利用すべきである（但しその吸収度が問題となるが）食用油としてマーガリンを用いたのは、これがラードよりも安価だったからである。

生野菜に対して各部員が何を期待しているのかつかめなかったので、その取扱いに困ったのであるが、ビタミン補給の意味なら錠剤を使うとよい。ホーレン草を例にとると、簡単な操作で重量を1/10にする事が出来るのであるが、この自家製品から、便通がよくなる（？）以外に何がえられるのかは、我々にはわかっていない。この為なら切干で充分である。

調味料は常に標準量以上に使用される傾向がある。計画当初からこれを見越していては費用のかゝる事明白である。そこでミソ、カンヅメ＋カレー粉（即席カレーでは

なしに）etc を主体として、その他の高くつく物は全期間を通じて数回使用するにとどめたい。つまりは安い物を多くという事である。但しカレー粉のみを使用するのは、たとえ最低ですむといっても無理な様である。チャーハン素が表Ⅱにある程度の一回量でよいなら、これからも使えそうであるが、油揚はあの程度の使用量では－これ以上は無理で単なる飾りである。

(e) （夕食）　モチ、これは安価をねらったが、B.H にて広島大学より譲られた物と比較すると、その質の差は明白である。しかも米よりは高い。当初、全キャンプ行動日に夕食α米使用を計画したがとてもそこ迄手はでなかった。他の大学山岳部では、オートミールや一度ふかしてから天日に干した米を用いている所もある。金と重量のわくの置方によっては現在の主食の選択を根本的に改める必要がある。鯨肉を全量 35kg と大量に使ったのは、一応冬のテストに合格したからであるが、その保存法には議論百出である。今回は「ラードによるから揚」をやったのであるが、その準備の際の苦労の割には成果は少なかった思う、というのは、安価多量に食べられ鯨特有の香もぬけて好評であったが味がぬけてしまっていた。(時間にせまられた為、処理の初めに熱湯をとおして冷凍をもどした）又あらかじめ適当な大きさに切り、大体一定量をポリエチレン袋につめておいたから、テント内での取扱いはしやすかった様だ。家で聞いた他の処理法は、①肉と同厚のミソで両面をはさめば夏季でも一ヶ月は保つ－相当からくなる事にも手を打つ必要がある－②サイの目切にしてラードであげて、塩コショウ等で味付をしておく。一ヶ月以上の長期、温度湿度の高低変化にも大丈夫との事。③薄切して相当量の醤油で少々こげつく迄煮詰める。ショウガ等を用いる。なお今回冷凍肉で用意した為、氷を食べるはめになったのは不注意であった。鯨肉の使用量を増やせば、魚缶のように缶の無駄をすることがなくなる。190g の内、実に 60g の缶を背負って迄コーンビーフを使った理由の一つには、C4 に於ては高度が下る為、鯨肉の保存に自信が持てなかった事がある。

(f) （昼食）　パン（特にウィンナロール）の越冬が大変心配であり、冬山で悪名をいただいた程だが、どの程度変質しているのか大阪では予想出来なかった。電気冷蔵庫に入れておいてもそんな風にはならなかったが、一応水分の凍結による硬化とβ化が主であろうと推察される。事実 B.H で、単に火にあぶるだけでうまいと感じられた。同じ越冬しても特製パンの方が食べやすかったのは、この方が生産時から水分が少ないという事のほかにも理由はある様だ。ウィンナロールを食用油で揚るテストも少々はやってみたが、結局副食を多彩にする事でゴマ化ス事になってしまった。チューブ入チョコレートバターがそれである。なお朝食時にはスープと組合せる事で越冬 WR

でも大して問題にはならなかったと思っている。そろそろ自家製でビスケットの試作を考える動きが出はじめているが、全面的に特製パンを使用出来なかったのも費用の点からである事を忘れてはならない。一般に、一日を通してばかりでなく毎食に於ても、「必要種が必要量だけある」のが望ましい。特に今回の様に長期にわたる合宿では、コンディションの調節を食事の面から考え、単に熱量だけを追求してはいけないと思う。この意味から、色々の反対もあったが昼食の魚ソーセージは残した。但しチーズは費用の点で落した。これは予備食として各人携行すべきである。

夏ミカンはボッカ時の水分不足と、とにかく新鮮なものという点から、少々無理をして用いた。これは冬山食糧より受継いだものである。皮が厚いから破損の分は計算に入れなかった。スキムミルクは冬の C2C3 の話を聞いて、或はホットケーキにでもとの意味から各テントに少量づつつけた。キーパーのいる B.H では夏山合宿に於けると同様に、キャンプに帰着した時に飲んだ。適当な器に入れれば、粉乳砂糖バター小麦粉の混合物を、パンの副食として携行する事も可能と思う。そうすれば合成ジャムは追放できるのではないか。但しこれはテントキーパーがいる時の話であるが。

玉井君試作の「ナメミソ」は、予備食非常食としても利用できる。越冬したが成分に分離してなかった。

中華ソバは調理の際、注意しないと団子になる。

(g) 今回上級部員の希望もあり、所謂「うまい」物をハイキャンプに重点的にまわしたのであるが、「滞山日数の長い」事をもって「うまい」物を要求する理由になるであろうか。計画全体の立場からは、「うまさ」に金をかける事は出来ない。キャンプの上下を問わず、「うまい（質の良い）従って単価の高いもの」を用いる時には、そのキャンプの行動内容を具体的に考えに入れた上で、合宿全体としての目標追求からくる必然性がなければならぬ。

(h) 行動、停滞による区別はほとんどつけなかった。計画の長期化に伴う出費の増大に驚ろいて、出費を減らす意味で、停滞食の質を一方的に落すのは誤りである。朝食は出発を前提としてとり、夕食は翌日の行動を前提にしているかぎり、行停の別はないはずである。昼食については、現実に動かないのであるから、主食と簡単な副食とですましても、費用の点からやむをえぬ事であろう。行動日にはさまれた、日付の定まった晴天停滞日では前日の夕食から昼食迄、つまり一日分だけを停滞食としてよい。又合宿後半に於ける撤収時の停滞では、明日は動くと予定されている日迄は昼食以外は停滞食ですましてもよい。この様に考えて、朝夕食にに於ける行停の別は形のみにとどめて特に朝食に於てはその選択をテント毎にまかした。但行動夕食に於て、共に

停滞食に近いのもであるとはいえ、上下キャンプ間に質の差、従って又費用の差の出来た事は前述の通りである。昼食に於ては、嗜好物的な物で差をつけた。

(i) B.H に於てキャンプ毎に配分する段階になり、数種にわたり－モチ・調味料・特製パン等－その絶対量が大きく必要量を下まわる事を知った。議論の末、重点的にしわよせを受けたのは、ロウキャンプ特に B.H であった。他からの補給考えられず、絶対量の不足している時でも、目標達成を目ざして統一行動をとるかぎりに於ては、所謂「先の長い」方を優先するのは当然である。この為 B.H に於て「食いのばし」を強要せざるをえなかったのは食糧計画担当者としては残念であった。こんな事態を避けるために「先発隊の取扱」「停滞日数の取方」を再検討すべきである。

B〔梱包、包装について〕（一斗缶重量は 1.2kg）

(j) 費用は冬の場合よりも割高についたが、これ迄示された一斗缶の利点－乗下車やボッカ時の簡便、内容物の保護－を認め、全面的に採用した。但し缶のエッジは注意を要する。なおカートンボックスとペンキの組合せが、雪中でも長期保存に使えたとの報告（法大）もある。

(k) 各食品の包装にポリエチレン袋が愛用されているが、固形以外のもの－例ジャム－には、どうもすっきりせぬようである。今春のチョコレートの好評の一因には、その取扱の簡便さにあったと考える。所謂「器を食う」点からも大して問題にならぬから、完全回収を前提条件として、既加工食品とポリエチレン容器の組合せを、将来考えていきたい。合宿に於てはレーションシステムは無理なようである。

C〔撤収時の残余食糧回収について〕

我々が食糧計画をたてる時、どれほど大きく金から制約をうけているかを考えると、残余食糧は出来るかぎり持帰るべきではなかろうか。帰阪後ルームに集結された余食糧の管理は食糧係が行う、公平に部員にかえすべき事は勿論である。全般に尻ぬぐいの悪いのが次期の合宿計画に大きくひびいている様に思えてならない。

なお、秋ボッカ済食糧については、該当する表を見られたい。

（笠松）

食糧 383kg（缶の重さを含む）	パン 1,450 個 マーガリン 57 ポンド ソーセージ 90 本（180 食分） カンヅメ類 60 個 （サバ・マグロ・コンビーフ等） 中華ソバ 280 食分 砂糖 29 斤 スープ類 30 箱 その他 レーズン、ジュースの素、メザシ、切干、味噌、塩、コショウ、ジャム、ピーナッツバター、ワカメ、スキムミルク、メリケン粉、ナメミソ	秋に荷上げした食糧
以上を 62 個の一斗缶、4 個のカートンボックスに梱包した。		

一九五九年度　　山岳部役員

チーフリーダー　野　田　憲一郎　経済学部四年

山　本　信　樹　工学部機械工学科四年

兼　清　喜　雄　工学部精密工学科四年

米　林　外茂男　工学部応用化学科四年

平　田　　彰　経済学部四年

尚、OB の尾藤昭二氏が監督として、広橋茂氏が副監督としてそれぞれ現役の指導にあたられる。

〔表 Ⅰ〕　　春　山　全　食　糧　表

	品　目	濁	B.H	C1	C2 (ABC)	C3	C4	A	合計	金
	パン　R-W	64 ケ	464	80	230	134	78		1050 ケ	9450
	特製		68	134	118	50	30		400 ケ	4000
	モチ	64k	52	22.5	37.5	20.1	7.2		146k	18300
	α米						20 ケ		20 袋	720
	中華ソバ	16	30	25	33	2.1	12		140〃	6300
	メリケン粉	1 袋	6	2	3	3	3		20〃	300
	鯨肉	2.3k	13.5k	5.3	8.8	4.2	10		35k	4700
	玉ネギ	(キャベツ2)	60 ケ	30	50	23	12		175k	1800
	夏ミカン	8 ケ	30	14	9				60〃	1000
	コンソメ	2 本	8	4	4	4	2		25	1900
	チャーハン		α	α	4	4	3		15	300
	ポタージュ		4 袋						24	1560
	カレー		0.24k	0.12	0.3	0.13	0.07		0.86k	60
	味噌	0.6k	5.2	2.3	3.8	1.3	0.7		14k	1100
	料理用マーガリン	3 本	16	9	9	7	4		46 本	1300
	油揚	6 枚	22	11	10	4	3		62 枚	620
	砂糖	1.0	5.5	3.0	4.0	3.0	1.0		17.5k	2000
	塩	0.5	2.3	1.1	1.8	1.0	0.6		7k	320
	コショウ			1	1	1	1		4 本	80
	スキムミルク		2	1	2	2	2		9 袋	1040
	ワカメ	3	4	1	1	1	1		11〃	80
	飲料　紅茶	0.15			0.25	α	α		0.45k	250
	ジュース		8	5		4	3		20 袋	800
	昼食用マーガリン	9	30	20	26	14	8		107 本	5130
	魚ソーセージ	16	56	38	30	13	8		160 本	4320
	魚缶		25	15	23	12	7		82 ケ	2300
	コンビーフ缶					3	12		15 ケ	1950
	切干	0.3	1.6	1.2	1.3	α	α		4.5 ケ	120
	乾ホーレン草					α	α		α	
	メザシ	0.7	3.3	1.4	2.5	1.0	0.6		9.5k	1400
	ジャム		α	α	α	4	3		7 缶	420
	チョコレートバター	6	23	15	12				56 本	2130
	レーズン(大)			3	4	4	3		14 箱	1260
	ナメミソ		α	α	α	α	α			

	ツケモノ				1	6	3		10 袋	200
	(百匁)ローソク	8	30	18	30	19	11	9	125 本	
	(4l 入)ケロシン	1 缶	5	3	5	3	2	1	20 缶	
	食糧総重量	25kg	200	100	135	85	50	25	620kg	
	装備　〃		5	26	27	28	30	14.7	140.7kg	
	食糧総額	4400	24000	12300	17700	10700	7800	——	——	77000 円
	全重量累積値	760kg	735	520	400	233	120		760.7kg	

〔この内約 380kg（食 325kg、装 55kg）秋荷上ずみ〕

〔又パッキング用ブリキ缶の重さ（1.2kg）費用（30 円）含まず〕

〔表 Ⅱ〕　C3 C4 に於ける行動日の献立

各キャンプに於ける標準 1 人 1 日量		朝食 行 C3 C4 数量	朝食 g 数	夕食 行 C3 C4 数量	夕食 g 数	金額(円)
パン	wiener Roll	2 ケ	200	——	——	18
中華ソバ	玉　蘭	1/2 ケ	150	——	——	22.5
モチ	阪　急	——	——	6 ケ	300	39.5
α米	尾　西 ライス	——	——	4/3 袋	/213	48
スープ類	30 人用 コンソメ	1/15 ケ	12/10	1/15 ケ	12/10	5.3
	ベル チャーハン	1/6	7.3/5	1/6 ケ	8.3/5	4.0 3.3
	チーズ ポタージュ	1/6	30/23.4	1/6 ケ	30/23.4	13 11
	カレー粉	小サジ 1/2	3	小サジ 1/2	3	0.4
	ミソ	——	——	——	30	2.4
食用油	リボン マーガリン	1/21	10	1/20 本	10	1.4 1.3
メリケン粉	300g 入	1/30	10/9	——	——	0.5
油揚		1/6	4	——	——	2 1.7
魚缶	カツオ フレーク	1/6	——	——	——	4.8 4.0
	サバ シーズン	1/6	55/	——	——	6.4 5.5
鯨肉	加工品	——	——	——	50	6.7 9.3
コンビーフ缶		——	——	1/6 缶	41.0/31.7	21.7
生野菜	玉ネギ	1/6	39	——	——	2
	キャベツ	——	——	——	——	1
	ホーレン草	α		α		
乾野菜	切干		5		5	
	ホーレン草	α		α		

各キャンプに於ける標準 1 人 1 日量		昼食 行 C3 C4 数量	昼食 g 数	金額(円)
パン	WR	——	——	18
	神戸屋 特製	2 ケ	250	20
バター	銀リス	1/6 ケ	44/38	8
	ミルクマリン	1/6 ケ		8.3
魚ソーセージ		1/2 ケ	70/	13.5
飲料	メイトー ジュース	1/6	19/	6.7 8.0
	紅茶	α	3.8	
	スキムミ ルク	——	——	5.8
嗜好品	ジャム缶	1/6 缶	76.7/61.7	10
	レーズン (大箱)	1/10 箱		9
	チョコレート チューブ	——	——	7.6
	夏ミカン	——	——	5
	ナメミソ	α		
メリケン粉	300g 入	——	——	0.5
砂糖	1 斤入 (600g)	1/20 袋	30	3.5

		朝食	昼食	夕食
濁	行	32	32	32
	停	——	——	——
BH	行	112	112	112
	停	40	40	40
C	行	75	75	75

←上表中 α 印は適量を意味する印はそのうちの一つ

	ワカメ	——	——	1/20袋		0.4	Ⅰ	停	——	——	——
バター	銀リス	1/9本	29.4/25	——	——	4.8 5.3	CⅡ	行	59	59	51
	ミルクマリン	1/9本		——	——			停	56	56	64
塩	精製		3		2	0.1	CⅢ	行	25	25	32
メザシ		——	——	1匹	10	2.5 1.3		停	42	42	42
漬物	新進漬	——	——	1/6ケ		3.3	CⅣ	行	15	15	15
茶		——	——	α	5	1.1		停	24	24	24

5 アタック食糧

サポートを受けず幾日も行動するアタック隊の為に本隊のそれとは完全に分離した食糧計画が必要となり大工原、玉井が担当し、梱包の際、田井、保母が加わって作った。その基本方針は「軽く」「カロリーが多く」「調理しやすい」事であり、費用の事は余り考えに入れぬ事にした。この方針に従って作ったものは表の通りで、三人 8.5 日分である。軽量化の為になるべく乾燥状態にある食品を用い、缶詰を使わず多くポリエチレン包装を用いた。これにより梱包後の全重量は 30kg を切る事が出来た。又調理し易い様にほゞ完全なレーションシステムを取り、便利で軽いα米を全面的に使用した。食糧のカロリーの多い事も重要であるが、その蛋白質の量にも注意した。ビタミン特に C は不足であったので各自錠剤を持参してもらった。使用した食品の主なものについて説明すればコンミート（日水の製品でプラスチックフィルムで包装してある鯨肉入りのもの。軽く安価）塩ふきコンブ（ベタつかぬツクダニで軽く塩味が強い）乾燥ホーレン草（熱湯処理後蔭干したカリカリのもの。元の重量の 1/10）棒ダラ（焼いた後天日で乾燥コチコチになったものを小さくきざんだ）ドーナッツ（脱脂粉乳を多く加えヴァニラで香りをつけて揚げた）調味料（スープ、カレーは一回分づつ分けてポリエチの小袋で包装）塩コショウ、砂糖はスキムミルクと一緒に別の小さいカートンボックスに梱包した。

結果として（三日ほどしか使わなかったのではっきりしないが）

一、軽量、高カロリー、簡単な調理という点ではほゞ成功したがその為一日の食費が二五〇円位になり、アタックの人には気の毒であった。

二、梱包は各レーションの袋を大きな塩ビのシートで包み、カートンボックス（大 4 個、小 1 個）に入れ紙テープでシールし縄をかけたがボッカ中に箱が湿り形がくず

れた。これは箱にペンキを塗り、背負子で運べば防げるであろう。一斗缶は重いわりに小さいので不利である。

三、昼食は歩きながら食べられるよう変化のあるものを選んだがすこし品目が多すぎたようである。

四、レーションなのでもっと朝夕の食事に変化をつけても好かったと思う。

（玉井）

アタック隊用食糧表			行動日 1 人 1 日 950g 250 円
全量 3 人×8.5 日分　29.5kg			
	品　　目	重　量	包　　装
朝食（三人一食分）	α米（尾西ライス）	3×160g	厚手ポリエチレン
	ポタージュスープ素	60g	薄手　〃
	日水コンミート	100g	プラスチックフィルム
	マーガリン	30g	硫酸紙
	塩フキコンブ	30g	ポリエチレン
	乾燥ホーレン草	30g	〃
	茶		〃
	一人分 250g　900cal、上記 3 人分をまとめてポリエチで包装		
昼食（一人一食分）	ビスケット	10g	
	クラッカー（カレー、バター、チーズ）	60g	まぜあわせてポリエチレン
	乾パン（アルパン）	90g	
	ラスク	30g	
	粟オコシ	25g	紙
	ドーナッツ（自家製）	50g	ポリエチレン
	のしいか（味付）	50g	〃
	甘納豆	50g	〃
	ブドウ糖玉	4 粒	〃
	チーズ	25g	アルミ箔
	チョコレート	15g	ポリエチレン
	一人分 350g　1350cal、一人分をまとめてポリエチで包装		
＊	別に停滞用として量のすこしすくないものを作った。 一人分 280g　900cal（チーズは入っていない） 一人分をまとめてポリエチで包装		
夜食（三人一食	α米（尾西ライス）	4×15g	厚手ポリエチレン
	スープ　コンソメ	1 粒	ポリエチレン
	スープ　カレー	20g	
	日水コンミート	100g	プラスチックフィルム
	ハム（スライスしたもの）	110g	セロハンに真空包装
	マーガリン	30g	硫酸紙

	棒ダラ	60g	ポリエチレン
	乾燥ホーレン草	30g	〃
	茶		〃
	一人分 350g　1300cal、一人分をまとめてポリエチで包装		
その他（全）	塩（食卓塩）	500g	塩化ビニール
	砂糖	600g	ポリエチレン
	コショウ	1 本	ガラスビン
	スキムミルク	10 人分	塩化ビニール

6 装 備 報 告

冬山の経験にもとづいて計画をたてたのであるが、キャンプが四つになり、アタック隊がテントを持って行動するという以外は殆ど冬山と同じであった。たゞ部の共同装備が老朽化しキャンプを四つ出すには不定品が多く、個人所有のものをかり集めると共に、かなりの金額のものを新しく購入した。

新しいビニロンテントは冬山の経験から、風の強い赤牛の稜線では張線が少なく不安定ななので 4 ヶ所のポールの中間から張線を引張ることにした。

炊事具については、石油コンロ（容量 1.8ℓ、ガス噴出式）、ラジウス中型、コッフェル二組を購入した。バーナーを購入するにあたり、特に注意したのは、部分品のスペアが容易に手に入るか否かという点である。ねじ一個を失なって使いものにならなくなったことが我々にはしばしばあったのである。最近、舶来バーナーの部分品を日本で製造しているらしい。しかし部分品を決して失わぬように心がけねばならぬことは当然である。

燃料はケロシンを使用したが、冬山と同様一人一日 130mℓの割合で計算した。乾燥用として特別に考えなかったが、不足を感じなかった。秋に荷上げしておいた分は（13 缶）缶の角をハンダづけしたもので、運搬時の衝撃でハンダがとれ、石油のもれているのが多数あったので、半分しか使用できないだろうと考えて計算したが、殆んど減量しておらず、結局、計画より 8 缶の余裕ができた。

ＣＩではテントを使わず雪洞を三つ掘った。謂ゆる阪大式というやつで、従来通り、グランドシーツの古いのをノレン式にペグでとめて内と外のしきりにしたが、風向によっては出入口は完全に埋没し、又、グランドシーツと雪壁の隙間から雪が吹き込んで毎朝除雪に苦労した。又、三個の中二個は天井の沈降著しく、一週間後には殆ど使用に耐えなかった。今後従来のやり方を踏襲するだけでなく、雪洞の研究に目を向ける必要があると思う。春山装備は表は別表の通りであるが、秋に荷上げしたものは次の如くである。

ケロシン 40kg、ザイル（30m）5 本、竹（旗竿）30 本　　（大島）

春　山　装　備　表

品　目	単重量	B.H	CⅠ	CⅡ	CⅢ	CⅣ	Attack	数量合計	重量合計
ナイロン 1 号（4 人）	7.8kg		1					1	7.8kg
〃　2 号（4 人）	5.2						1	1	5.2
ビニロン 1 号（4 人）	11.0			1				1	11.0
〃　2 号、3 号(5 人)	12.0				1	1		2	24.0
スコップ　大	1.6		1	1	1	1		4	6.4
〃　小	1.0	1	1				1	2	2.0
ノコギリ	0.5	1	(3)	(3)	(3)	3		3	1.5
グランドシーツ	1.5		4	2				6	9.0
ツェルト	1.0					1		1	1.0
ザイル テリレン(40m)	2.0						1		2.0
〃 麻　(30m)	3.0						1		3.0
〃 Fix 用麻　(30m)	3.0	(2)	3	3	2	2		12	36.0
ハンマー	0.5		(1)	→(1)	→(1)	→ 1	1	2	1.0
カラビナ	0.15		(20)				3	23	3.45
ハーケン	0.05		(12)	(2 組が先頭を移動)			5	17	0.85
赤　旗		20	20	20	20	20		100	
竹　竿	0.08		20	20	20			60	4.8
バーナー	1.0	1	1	1	1	1	1	6	6.0
石油コンロ	3.0		1					1	3.0
ナベ　大	2.0	1						1	2.0
〃　小	0.5	1						1	0.5
コッフェル	0.8		2	1	1	1	1	6	4.8
ヤカン	0.25	1						1	0.25
シャモジ	0.25	1	2	1	1	1	1	7	0.35
ガスアミ	0.5	1	1	1	1	1		5	2.5
ナタ	1.0	2						2	2.0
たわし	0.05	2	2	1	1	1	1	8	0.4
修理具一式		(1)	→	1					
テルモス	0.9					2	3	5	4.5
ケロシン 4ℓ 缶	4.0	6(1)	3	5	3	2	1	29	80.0
ローソク	0.06	38(8)	18	30	19	11	9	125	9.37
合　計									234.7kg

一九五八年度

冬山合宿報告

涸沢岳西尾根より北穂高岳・奥穂高岳

1 行 動 概 要

本年度の最大の目標が春におかれていたので冬山はトレーニングという性格が強く、冬山のために長い準備期間を設ける事は出来なかった。合宿の候補地は結局、涸沢西尾根と薬師が残った。しかし、薬師は冬期のアプローチの困難さと、予想される悪天候、記録がない事等種々の悪条件がそろっている点を考えて、新人のトレーニング、中堅メンバーの尾根歩きを重点とした場合穂高の方がよいという事になった。

穂高はすでに多くのルートが開拓しつくされ上高地から入ったのでは先人の足跡をたどるというにとどまるので、最近トレースの記録がなかった西尾根に目をつけたわけである。(1933.1 月沢筋をへて尾根に取つき、横尾へ横断した記録が、山岳？に載っている)

秋まではテントが全部で 3 張りしかなくて、キャムプを 3 つ出す事が可能かどうか疑問であったし、又尾根に雪洞が掘れるかどうかも不明であったが、12 月に入ってからテント寄附が着々と集まり、6 人用新テント 2 張を確保出来たのでテント 4 張りをフルに動員し多くのメンバーに雪中露営技術を修得してもらうことが現実化された。

一方、我々の計画は最初から、尾根を末端からつめる予定であった森林帯の通過については何ら知り得たものがなかったので先発隊の偵察が終るまでははたして尾根すじを荷上げ出来るかどうかが不明であった。しかし、我々は最も確実な線として、まず柳谷小屋を B.H とし、森林帯の中間に ＣⅠを置き、CⅡを蒲田富士、涸沢頂上に ＣⅢを出して北穂アタックを行い、森林帯の通過に時間を節約出来れば ＣⅠを蒲田富士直下において ＣⅡを涸沢岳頂上に、CⅢを北穂に出して槍ヶ岳アタックする予定であった。

行動予定表は別表のとおりである。

期間　12 月 21 日――1 月 6 日

メンバー　山本（CL)、米林（SL)、兼清（SL)、平田、木村、田端、平野、田村（医)、大島（装)、佐藤、大工原（食)、玉井（食)、村井、田井（食)、中村、錦田、谷垣、

長谷川、五百蔵、白井、西垣、宇野、打出、前沢、高橋、酒井、黒木、金子、以上28名、OB　広橋、西川、近、宮本、東、以上5名。

12月22日　先発隊、兼清、佐藤、打出、前沢、高橋、酒井18.09大阪発。

12月23日　先発隊　高山－神岡－柳谷小屋　正午に柳谷小屋へ到着し、午後白出沢出合までトレースを行ったが積雪は少い。

12月24日（曇）　8.00小屋発、尾根に取りつき森林帯を偵察する。CⅠキャムプがどうにか張れる場所を13.00見出し、さらに上部へ1時間登り14.00昼食する。食後すぐに下った。ガスが濃くて全く視界がきかない。

本隊22名18.06大阪発。

12月25日（快晴）　本隊は柳谷小屋へ入る。

4.54高山着－5.50発（専用貸切バス）－8.25蒲田着9.00（トラック）発―10.00分岐点にて下車、12.00全員柳谷小屋集結、13.00～16.00スキーとワカンをつけて出合附近まで偵察をかねて足ならしに行く。

車の手配が十分に行き届いていて、簡単にB.Hへ入る事が出来た。また雪はごく少く蒲田ではまだ積っておらず、白出の出合でもせいぜい2尺程度であろうか。

12月26日（みぞれ）　5.10起床、6.20発、7.50　8.15取付、10.45CⅠ、13.30テントに入る

朝からじっとりしたみぞれが降っていたが荷上げを強行する。

白出の出合から、ルートは白出沢の中を約500m上る。左手の西尾根斜面の途中に1ヶ所だけ樹林の切れ目が巾20mぐらいで主尾根に向ってまっすぐに伸びている。積雪が不十分であるのと、草の葉がたおれているのとで、ワッパがうまく雪の上にのってくれない。主尾根上でも積雪量は30～60センチ程度か。樅の原始林の中に笹が生い繁りストックや荷物がさんざんひっかかって、夏のブッシュこぎと大差がない。尾根は上に行くにしたがって急である。取付より2.30時間でCⅠキャムプ地に到着したが尾根がせまい上、勾配がきついので広い場所がない。少ない雪をかき集め樹の枝をひいてどうにかテント2張り（V2、N1）を張る。みぞれの中を登ったので全員ずぶ濡れで寒いことおびただしい。

12月27日（雪）　B.H停滞、CⅠ11.00発、14.10　14.25デポ地発、15.00テント着

9時頃まで気温高くみぞれであったのが雪に変わったので、ボッカをする。各自16kg、CⅠのすぐ上で尾根が急傾斜になっているのでこれを左にまく。トラバースの雪の状態が悪かったからこゝに30mのフィックスを行う。ザイルの両端は樅にくくりつけた。そこからさらに岩と下枝のまざり会った中をくぐりぬけるようにして30分も登ると

4m 程の岩のフェースに行きづまる。雪がかぶさっておらず、ホールドがないのでここに 3m のフィックスを行いワカンをはいたままこじ上る。このあたりから尾根は細くなってくるが少し歩きやすい所がつづきテントの張れそうな所もある。ここより 30 分程で再び岩が尾根の眞上に露出している所へ来る。新雪で見えない割目に注意して通過。その上で 6m の急な岩が露出している。これはフィックスすれば問題ない。14.00 尾根の上が少しひらけた所にデポをして帰る。

12 月 28 日（小雪）　B.H6.30 発、10.30CⅠ着、12.00CⅠCⅡ両隊合流して出発、14.00 深いラッセルの急斜面、14.30 デポ隊下山、16.00 キャムプサイト着

天候悪化を予想したが B.H からのボッカ隊が 10.30CⅠに着く。又ラジオで天候回復をキャッチしたので CⅡメンバーも合流して出発。デポ地通過後も、ぐんぐん高度を高める。時々晴間も見えて来る。やがて尾根が明るくなり、急な雪斜面があらわれる。雪崩の出そうなほど急な斜面で長さも 100m はあろう。雪面の右端を腰までもぐりながらラッセルをする。B.H 隊は岳樺の現れはじめたあたりで荷物を下してすぐに下山、CⅠのメンバーは、フワフワの新雪に悩まされながら蒲田富士直下 300m の尾根のジャンクションまで荷物を上げた。CⅡ泊りは平田、兼清。

12 月 29 日（晴）　B.H 高橋、谷垣が CⅠへ連結に 7.30 発、他の新人等大工原、西垣、金子、長谷川、宇野、白井、五百蔵、黒木、酒井、前沢は槍平へ行く。12.00 広橋(OB)来る。14.30 広橋、田井、中村、平野 CⅠへ出発。田端は小屋番。CⅠ10.00 発－CⅡ14.00 山本、米林、木村、大島、田村、佐藤茂、玉井 CⅠより CⅡへ入る。

CⅡ10.00 発－14.35 涸沢岳－CⅡ17.30 兼清、平田は CⅡより頂上までフィックスをする。

12 月 30 日（快晴）　起床 6.00　出発 10.00、13.45 涸沢岳、CⅡ14.00 キャムプサイト、14.30 サポート CⅡへ、16.40 テントへ入る、CⅢへアタックメンバー山本、平田、田村、大島が入る。サポート米林、木村、兼清、玉井、佐藤、CⅡへ玉井、村井、平野入る。

CⅠへ打出、前沢、高橋、谷垣入る。兼清 CⅡより CⅠまで下る。CⅠまで西垣、金子は連絡のために 6.45B.H 出発。

B.H 田端、五百蔵、酒井、宇野出発、9.50 槍平 13.05 中崎尾根着 4.20B.H に帰着。

CⅡのメンバーのうちアタック隊は個人装備と若干の荷物を、サポートはザイル食料その他で全員 18kg 以下の荷で前日の平田、兼清のトレースをたどって荷上げをする。出発に際してテント撤収荷分けその他で時間を食いすぎ出発は 10.10 となったが天候はあまりに良く、加えて新雪が全くないのでぐんぐん登り滝谷の絶景を心行くま

で楽しんだ。頂上付近でテント場を探したが飛騨側で尾根上では雪が吹き飛んで石がガラガラに露出しているのでやむ得ず。さらに穂高小屋の方に下り、ケルンの横にテントを張る。

12 月 31 日（風雪）　B.H、CⅠ、CⅡ、CⅢとも停滞。

　C1から B.H へ兼清が下る。又 B.H の西垣、五百蔵、白井、酒井、宇野、長谷川、金子、黒木、広橋(OB)が平湯へスキーに行くため下山する。

1 月 1 日（曇後風雪）　CⅡからアタックする。

（米林、村井、平野、木村、田井）

　田端が B.H より CⅡへ入る。7.45B.H 發、10.30CⅠ着。14.30CⅡへ到着す。うちでは CⅠから CⅡまで往復す。西川(OB)、宮本(OB)、近(OB)、大工原が B.H から CⅠに入る。谷垣、前沢、中村、高橋が CⅠから B.H へ下る。CⅡでは午前中曇っていたが風が弱かったのでアタックを行ったが奥穂の登りの頃から風が出だし、相当風が強くなったのでやむなく穂高小屋に泊る。

1 月 2 日（快晴強風）　山本、平田北穂アタック、5.00 食事、6.30 テント発、7.00 降りに、9.30 涸沢槍、12.05 北穂、12.50 発、15.40 テント着。

　CⅠ西川、近、宮本 3 氏が CⅠから涸沢頂上往復、CⅡアタック隊 5 名 CⅡへ下る。

　B.H 高橋、前沢、中村、飛騨乗越手前まで行ってひきかえす。

　記。平田と大島の 3 人で外へ飛び出す。20 日過ぎの月が頭上に明るく、奥穂に手がとどく如く見える。食事係の田村がうまくやってくれたので食事は早過ぎた程だ。風が少しきつく地吹雪が顔にあたって痛い。涸沢岳頂上へつくまでに大島が「右手がものすごうだるいねん」といいだす。北穂までのバランスの悪い所が多い事を考えると安心して大島をつれていく自信がない。全く気の毒であったが、田村と奥穂へ行ってもらう事にした。

　クサリの所は雪があまりついておらず、鎖を利用して下降、涸沢槍は涸沢側をまいて上へ上る。この付近雪の傾斜は 45°を越しトラバースは一人ずつザイルで確保しながら通ったが危ない。この下降は雪のつき工合が悪く危険を感じる。その次の小ピークは尾根が細い。涸沢側は急な雪の斜面、尾根すじはラッセルが深くて登れないので雪崩の危険を感じつつアンザイレンして涸沢側をトラバースする。それからは尾根筋であるが、ルートがはっきりせず、時間を浪費した。特に滝谷側は西風が下から猛烈に吹き上げて地吹雪になり目もあけられぬ。夏道の上に積った雪はクラストして所々青氷も見られた。

　北穂の鞍部で岩かげに風をよけて昼食。

帰路は出来るかぎり尾根上にルートを取ったので比較的早く帰った。

1 月 3 日（雪）　玉井 CⅡ→CⅠ、そこで打出、大工原とテントを撤収し B.H へ。CⅡ、CⅢは停滞する。近 OB、宮本 OBCⅠ→B.H。

B.H 東 OB、前沢、谷垣、高橋、飛騨乗越往復。

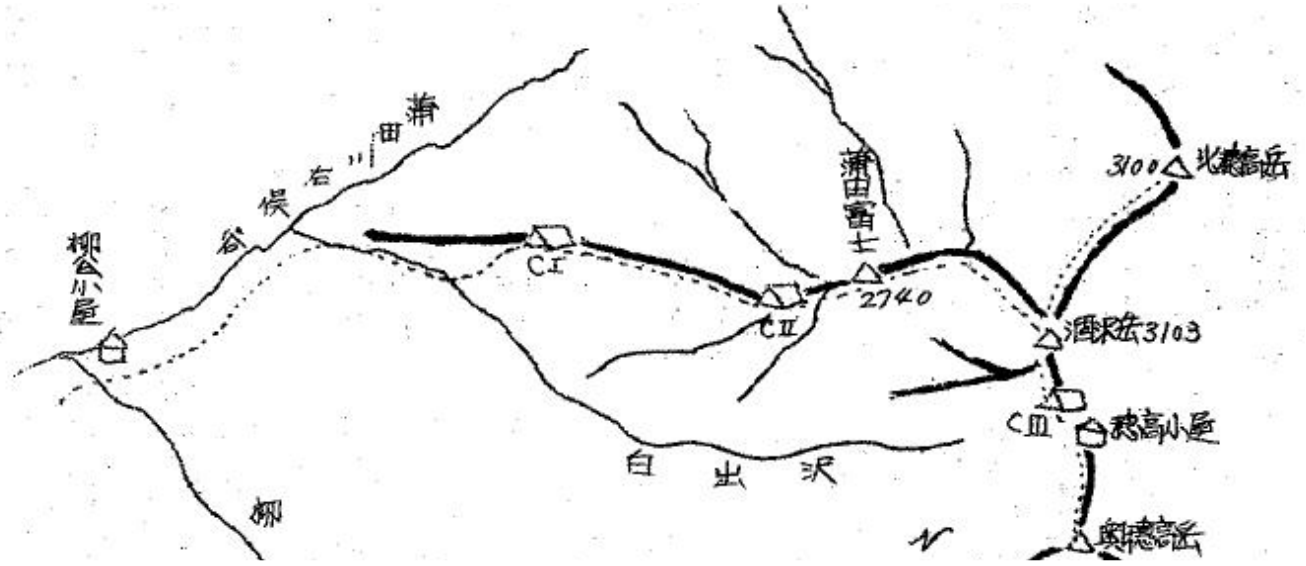
1 月 4 日（風雪）　CⅢ、CⅡ停滞、田端、佐藤 CⅢへ撤収サポートに登ったが、佐藤疲労のためひきかえす。中村、前沢、高橋 CⅠへ残りの荷物をとりに往復。

1 月 5 日（曇後風雪）　B.H 停滞、CⅡより田端、木村の 2 名が前日に連絡に失敗したのであまりよい天気ではなかったが、CⅢへむけて出発したが稜線では風が強う CⅢへ着いた頃は指の感覚がなくなっていた。ちょうどその頃 CⅢでも撤収中であったのでテントを撤収してから田端、木村の手が不安なのでやむなく穂高小屋へ入る。両名とも相当ひどいらしく、劇痛を訴える。微温で 1 時間以上温めて小屋に泊る。名古屋工大の 4 名と同宿した。

1 月 6 日（曇）　6.00 穂高小屋発、9.30CⅡ着、4.00CⅠ着、5.00B.H 着。

夜半に入り星空に変ったので未明早くから準備して天候悪化のまえに急いで下山した。

（山本信樹）



行動予定表　　行動日のみについての表である。

行動日	B.H.(柳谷小屋)	CI(森林帯中)	CII(第田富士)	CIII(宮沢頂上) 光壁 奥壁
1	⑧ →	V1 V3		
	← ⑳	← N1 V2		
2	⑤ →	④ →	N1	
	← ⑮	←	← V2	
3	⑤ →	V1 V3 ⑤ →	N1 V2 ④	
	← ⑩	← ④	←	
4	②	④ →	N1 V3 ④ →	V2
	←	← ⑤	← ⑤	
5	← 若干	← ④	←	③ 光壁
			← ⑤	← 奥壁
6	←	←	←	
最終ヤベムプ配置		V1	N1 V3	V2

図中　⑤は行動人数

V1 V2 V3 はビニロンテント、1、2、3号を示す。

2 食　糧　報　告

この冬山計画が、春山黒部上廊下横断のためのトレーニングという形であったのと同様、食糧計画も又、春山のための試験が主たる目標であった。その献立を表1に示す。

1．概要

一、B.H では薪、水が使える様なので主食は米を使った。

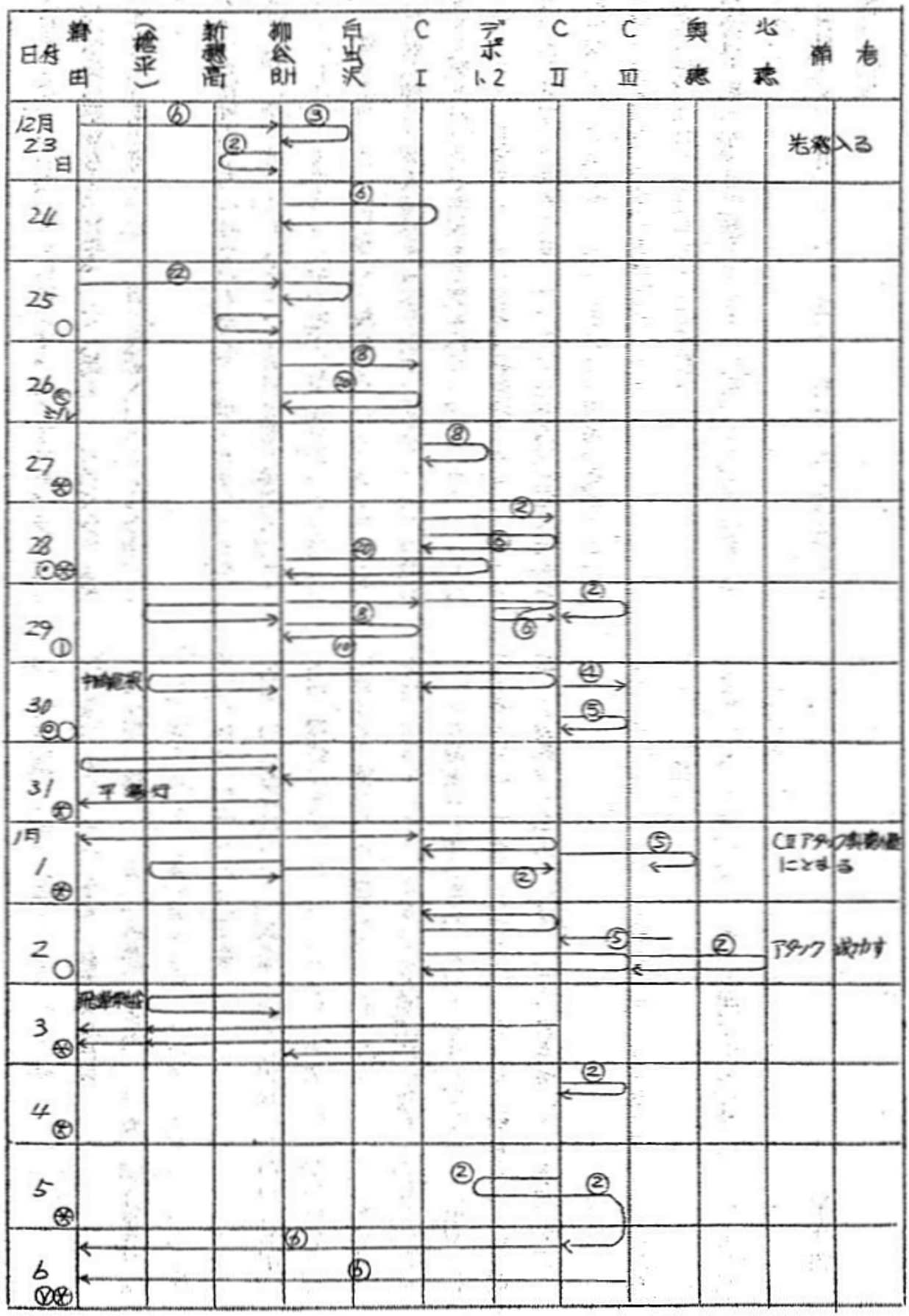
二、CⅠ以上では、餅、中華ソバを主に使った。

三、蛋白源として、初めて鯨肉を使った。

四、初めてアタック食を作った。

五、十八日分二千二百円の限定の下に量を十分にすることを主眼にした。

行動表


日付
綿田
(槍平)
新穂高
柳谷
白出沢
C I
デポト2
C II
C III
奥穂
北穂
前
春
12月 23日
24
25
26
27
28
29
30
31
1月 1
2
3
4
5
6
先発入る
アタック成功す

六、朝食を作り始める頃は、まだ行動か停滞かはっきりしていないのが普通なので、朝食には行動食、停滞食の区別をつけなかった。

七、ボッカ員が割に豊富なのと、計画を立てる上の簡素化のため、どのテントもほとんど同じ献立とした。

２．梱包

B.H 以外はすべて一斗缶を使用し、ＣⅠ3 回、CⅡ3 回、CⅢ1 回のボッカで上げる様にした。又どこでボッカが止まっても、各テントには 5 日分以上の食糧がある様に荷分けし、缶の表には、ボッカ順、重量、内容等を各テントで色分けした表をはって、手ちがいの起らぬ様にした。尚、今度から新たに梱包係（佐藤）が出来たので、食糧係は計画の立案と買出しに専念出来たのはありがたかった。

３．一日分の価格及び重量

一人二千二百円の合宿費の内、食糧の分は一人約二千円である。これで十八日分の食糧を作ったから、一日分百二十円で、最近贅沢化しつつある食糧をぐっと引きしめることが出来たと思う。重量は各テント共一日、1.1～1.2kg（梱包共）で普通である。CⅢだけはもう少し軽くしたかったが、値段の点から出来なかった。

４．各食糧の使用状況及び反省

餅は 1 個 50g のもので、一食に 6 コ食う様にしたが、適量と思う。パンはウインナロールを使った。今度の合宿で最も不評判なのがこのパンで、その固さたるやゴムパンとたちまちアダナがついた程である。このパンを、合宿後大阪へ持ち帰ったら再びやわらかくなったことからみて、水分の凍結が原因らしく今度はビスケット等水分の少いものを研究してみる必要があると思う。「玉蘭」という中華そばは圧縮乾燥してあり、持ちはこびに便利で調理も早いが、値段の割に量が少い（150g、22.5 円）。鯨肉は冷凍したものを出発日に購入、約 800g づつポリエチレンの袋につめた。これを汽車の間はデッキに置いてとけないようにし、B.H 以上は雪にうめた。ＣⅠ以上では固く凍結したまゝで、最後まで使用出来たが、B.H では雨が降ったゝめ、30 日に全部使用した。今後も高度の低い所では、缶詰と併用するのが望ましい。乾燥野菜は大根の葉を干したものを作ってみたが、天候が不順で良いものはあまり出来ず ＣⅡＣⅢにはめいわくをかけた。生で干したものより、一回さっとゆでて干したもののほうが成績が良かった。（栄養価はほとんど零であろうが）乾燥野菜の代用に切干を用いたが、次第に評判は良くなっていく様で心強い。「みかん」は四貫箱をそのまゝB.H に上げ、こゝで各テントに荷分けした。非常に評判が良く、今後も野菜の少なくなる冬春には使用すべきだと感じた。尚箱の約一割はくさるものと覚悟してそれだけ余分に購入すべきである。

調味料はいつの合宿でも不足勝ちであるので、今回は思いきって増量したつもりだったが、やはり不足で、B.H では特にひどかった。みそは一食 30g 以上、他の調味料も公称二人前以上を一食に計算せねばならない。大ナベを使っての料理の時は、もっと多くてもかまわない。

５．その他

一日百二十円ではどんなものが出来るかということが、我々三人の興味の的であった。結果的には、天候が割に順調で、予定より早く計画が進んだので、CⅢ以外は食糧が余り、後半は食い放題となり、余り文句も出ず食糧係としては、誠に有難かった。たゞ栄養のないものは、すべて省くという方針から、「お茶もない」ということで、相当文句が出た。お茶のあるなしで相当基分のちがうものである。行動用昼食を行動計画表に従って行動日の数だけしか作らなかったのも失敗だった。天候の悪い日も半日だけ動いたり、連絡が出たり、余分の偵察があったりするからである。今後は停滞食の一部は行動食に切りかえられる様なものにしておくべきだと思った。又今度の様にテント間の距離が短く、ボッカ員も多いときは、従来重量の点から捨てられていたショウユなども持っていって良いのではないかと思う。

パン	1065 個	ヘッド	1g
米	427 合	丸干	500 匹
餅	22.9kg	ソーセージ	65 本
中華ソバ	147 袋	オレンジピール	200 玉
ミソ	12kg	塩	2kg
マーガリン	36 ポンド	ミカン	120 個
コンソメ	440 食	切干	2kg
玉ネギ	166 個	スキムミルク	1.5kg
乾燥野菜	500g	アタック食レーション	16 袋
ワカメ	10 袋		
サバ缶	17 個	冬山全食糧	
カレー粉	3.3kg		
鯨肉	24kg		

各キャンプの食糧

（1 人 1 日 1.1kg 約 120 円）

キャンプ	食数	重量 (kg)	備　　考
B.H	545 食	185	水と薪があるので米主食
CⅠ	327	130	―――
CⅡ	306	105	アタック食 10 袋を含む。
CⅢ	75	28	アタック食 6 袋を含む。

<table>
<tr><th colspan="3">献　立　表</th><th>主　食</th><th>副　食</th></tr>
<tr><td rowspan="3">朝食</td><td rowspan="3">停滞・行動の区別なし</td><td colspan="2">B.H</td><td>米1.0合
モチ1個</td><td>みそ25g、玉ねぎ1/4、ワカメ、ヘット、丸干し1匹</td></tr>
<tr><td rowspan="2">CⅠ・CⅡ・CⅢ</td><td>a</td><td>パン2個
中華ソバ1/2</td><td>コンソメスープ、バター1/12ポンド</td></tr>
<tr><td>b</td><td>パン2個
モチ1個</td><td>みそ20g、玉ねぎ1/4コ、バター1/12ポンド</td></tr>
<tr><td rowspan="2">昼食</td><td>行動日</td><td colspan="2">CⅠ・CⅡ・CⅢ・B.H</td><td>パン3個</td><td>ソーセージ1/3、バター1/12ポンド、オレンジピール1コ、ミカン1/2個</td></tr>
<tr><td>停滞日</td><td colspan="2">〃</td><td>中華ソバ1/2袋</td><td>コンソメスープ、玉ねぎ1/4個</td></tr>
<tr><td rowspan="6">夕食</td><td rowspan="4">行動日</td><td rowspan="2">B.H</td><td>a</td><td>米1.5合</td><td>コンソメスープ、玉ねぎ1/4、サバ缶1/4、丸干し1匹</td></tr>
<tr><td>b</td><td>米1.5合</td><td>カレー20g、玉ねぎ1/4、鯨70g、丸干1匹、みかん1/2</td></tr>
<tr><td rowspan="2">CⅠ・CⅡ・CⅢ</td><td>a</td><td>もち6個</td><td>みそ25g、切干10g、鯨70g、丸干1匹、みかん1/2</td></tr>
<tr><td>b</td><td>中華ソバ1/2</td><td>コンソメスープ、乾燥野菜10g、鯨70g、丸干1匹、みかん1/2</td></tr>
<tr><td rowspan="2">停滞日</td><td colspan="2">B.H</td><td colspan="2">行動日　夕食に同じ（みかんなし）</td></tr>
<tr><td colspan="2">CⅠ・CⅡ・CⅢ</td><td colspan="2">行動日　夕食aに同じ（みかんなし）</td></tr>
<tr><td colspan="5">一応献立は上の様であるが実際の運営は各キャンプの食糧責任者に任せた。（1人1回分で示した）</td></tr>
</table>

6．アタック食

アタック食は、昨年の春山の経験から、初めて作った。2回程試作して見るなど量の決定には苦労したが、一応表Ⅲの様なものを作って見た。チョコレート等の嗜好品をもう少し増やしたかったが、価格の点からがまんした。一袋で大体二食分の量があるが、アタック隊はこれを一人2袋と、別に一般の食糧からパンとその副食を2食分携えた。これで一晩のビバークには十分の量である。使用後の感想としては、量は十分であるが、ビスケットは歯にねちゃついて食べにくかったとのことであった。尚アタック食作成には係を別に一人（錦田）をおいた。一袋86円で他の昼食より相当高価であるが、それだけの効果は十分あったと思う。

◎CⅢの食糧状況（田村の報告による）

CⅢの食糧は行動2日分、停滞4日分であったが、実際は7日滞在し、撤収の前日CⅡから二名が加わったために食糧が不足し、三日頃から食いのばしを行った。CⅢの食糧缶から若干の副食が欠けていたため、CⅢの食糧は相当さみしいものであった。今後の計画には稜線では行動一日に対し、三日以上の停滞を見込むか、別に予備食を用

意する様にすべきだと思う。オマケとしてアタック食に入れておいたココアは非常に好評だった。（大工原）

3．装　備　報　告

装備に関しては、春山にそなえて、いかに荷物を運ぶかという経験をえることと、新しく作ったビニロンテントの性能を調べるのが主な目的であった。ケロシンが CⅡに上りすぎるなど種々不手際はあったが、大体要領はつかめた。

新しく作ったテントは底面が大きく、ブッシュの中の ＣⅠではキャンプサイトを広げるのに苦労した。又、大きさ、高さの割に張線が少なく CⅡでは少なからず強風にあおられたようである。

燃料はケロシンを使用し、一日一人 130ml の割で計算した。実際、CⅢでは 4ℓ缶一ケで四人が丸一週間生活したが、十分に使って後二日分の余裕があった。

共同装備は春山の表と殆んど同じなので省略するが、概略だけを示す。（大島）

冬山装備概略

テント	ナイロン 2 （内新人合宿用 1） ビニロン 3
ツェルト	2
バーナー	6 台
コッフェル	5 組
ナベ（大）	2
ローソク	74 本
竹竿	25 本
赤旗	60 枚
ザイル	Fix 用 200m 登攀用　麻 30m テリレン 40m

新人スキー合宿報告（平湯）

新人のスキー合宿は昨年より冬山合宿の前半に参加の後、行う様になり、今年も初め槍平で行う予定であった。しかし槍平の小屋が満員で使用出来そうにないので出発の寸前に平湯に変更となった。現役からはリーダーとして冬山合宿の方がスムースに行き早く C3 が建設できた場合は兼清が冬山合宿の方の予定が遅れた場合は田村が受持つことになっていた。

冬山合宿の方はかなり順調に行ったので、12 月 31 日に BH に兼清が降りたが、広橋 OB が同時に BH を出発して平湯に向った。リーダーの兼清は一日遅れて参加した。平湯での宿は連絡の手ちがいから初め野田が予約しておいて所に行かなかった。この冬はスキー場はどこも雪が少なく平湯もどうにか滑れる程度で急斜面などの使用は不

可能で基本的な事を練習するのがやっとであった。この様にスキー場で宿を利用しての新人合宿は効果がうすい様に思われた。

期間　12 月 31 日～1 月 5 日

メンバー　兼清（L）、五百蔵、酒井、長谷川、西垣、金子、白井、宇野、黒木、広橋（OB）

（兼清喜雄）

総　会　報　告

本年度の総会は 5 月 30 日 6 時 40 分より記念館一階の阪大食堂で開催された。篠田先生をはじめ、新保、徳永、大島、尾藤、坪井、宮本、広橋、西川、高木の諸先輩が出席され、現役とも 29 名であった。

広橋 OB の司会ではじめられ、篠田先生の挨拶につづき昨年度合宿報告、会計報告、新リーダー（野田）紹介、篠田先生の外遊の話（別項）自己紹介を兼ねた諸先輩や現役の幾人かの話、等が行われた。

一九五八年度

夏山合宿報告

昭和三十三年度も前年度についで多くの新人が入部し夏山合宿も四十人以上の大人数となった為、今迄の様な合宿形態では全員に完全に目がとどきかねるので新しい試みとして全体を二つの大きいパーティに分けて、それぞれにサブリーダーをつけ、別個に行動することにしたが、合宿場所は同一とした。

計画の概要は合宿用の荷物全部と縦走の荷物の一部をかつぎ称名から八郎坂を上って二日で眞砂沢出合の合宿地に入ることにし、縦走の荷物の一部はケーブルとバスで追分に上げた。

期間　七月十六日～七月二十六日

メンバー　兼清（CL）、山本（SL）、野田（SL）、米林、平田、乾、田端、平野、木村、広瀬、田井、佐藤、大島、村井、大工原、田村、笠松、玉井、三宅、森村、金子、

谷垣、九尾登、伊藤、西垣、前沢、保母、錦田、比嘉、吉本、五百蔵、森田、黒木、北橋、長谷川、中村、丸尾、打出、菊池、酒井、高橋、佐藤（T)、星野

7 月 15 日に先発 4 名（野田、平田、大工原、高橋）が富山に行き、米、野菜、バス etc の準備をした。
7 月 16 日　本隊大阪発。
7 月 17 日（晴）　称名までバスで行き、ここでケーブルで上げた縦走の一部分の荷物以外を全部かついで出発した。約 40kg、この日は前夜の車中の疲れもあり、又、最初から八郎坂の急坂を登ったので追分止りであった。
称名発 9.30－追分小屋 16.30
7 月 18 日(晴）　追分から一気に雷鳥沢を登り眞砂沢出合に着いたのが 6 時であった。すでにキャンプサイトが完全にふさがっていたのであらかじめ予定した通り眞砂沢台地を一段降りた二股側の草地を開いてキャンプサイトを作った。
追分発 7.00－天狗平 9.40－雷鳥沢下 12.25－別山乗越 14.25－眞砂沢出合 18.00
7 月 19 日　曇一時ニワカ雨
　昨日が遅かったので今日はグリセード、滑落停止 etc の練習のみを行うこととし、12 時から長次郎の雪溪に行った。
7 月 20 日（雨）　停滞
7 月 21 日（曇）　今にも降り出し相な天気であったので全員一緒に池の谷のコルまで行動す。
7 月 22 日(曇一時雨）　予定通り今合宿に入って初めて各パーティに別れて行動する。途中雨に降られた。最初の行動日なので尾根を歩いて体をならすことにした。
　源次郎尾根、八ッ峰上半、八ッ峰下半、三の窓－平蔵谷
7 月 23 日（雨）　停滞。出発するも、すぐ雨で引き返す。
7 月 24 日（曇午後一時雨）　毎日いつ雨が降り出すか知れない天気なので岩にはてを出すことが出来ず、今日の行動も 22 日とメンバーを入れかえただけであるが一パーティが眞砂沢をつめて別山の方に登った。
7 月 25 日（雨）　停滞、今合宿も今日で終わりであるがその最後の日も終日雨が降り通しであった。
7 月 26 日（曇、雨）　名古屋工大の人に天気図を見せてもらうと台風が本土に近づいており明日晴れる可能性はうすいので一日の予備食料はあったが相談の結果今日撤収することにした。12 時に眞砂沢出合を出発したが平蔵の出合を過ぎたあたりから雨が

激しく降り出し、剣沢の小屋の所では新人は相当疲れていた様であるが、乗越を越す頃から雨もやみ風もおさまって一人の落伍者もなく雷鳥荘の所まで降りた時は 5 時頃であった。相談の結果このままテントを張ったのでは衣服が完全に中までずぶ濡れなので確実に一人や二人は病人が出るものと思われたのでその夜は雷鳥荘と房治の湯に分けてとまらせ、着くとすぐ全員温泉に入れて病人の出るのを防いだ。

合宿を終って

今年の合宿は雨に降られ通しで満足に行動することはできなかったが、パーティを二つに分けたことは統制をとる上において成功であったと云える。今後考えねばならない事は合宿期間をもっと長くして雨が降っても行動日が相当ある様にすることである。又天気の方も気象通報を聞いてある程度の判断を下せる様、普段から心掛けておくべきである。

撤収の時の悪天候にもかかわらず、二・三人が風邪になっただけですんだのは幸いであった。（兼清喜雄）

ヒマルチュリだより

―――徳永篤司氏への手紙より―――

住　吉　仙　也

○

『30 日（月）眼をさますと五時。まだ暗い。“明るい上高地（ヤルー）”を期待して Tent の外をのぞくと、雨こそ降っていないがどんより曇っている。まだ早いんだから、日が出れば晴れるかも知れないと暖かいシュラーフの襟を合せる。

とうとう期待外れ。加えて出発の頃から雨と来た。橋を渡り右岸の高巻き、しっとり黒光る岩にスリップすること二度。ジャガートに着く頃やっと暖かい日射を見る。Indian Operator と無線アンテナ、チベット国境が近い為の政治的な Operate なのだろう。やゝ部落らしい形態はあるが、吾々の総てに好奇の眼をみはる土人と奇妙なる対照を感じさせる。

ゴパール（Liaison Officer）が出発の際見せた、父親、妻との儀式。ブラーマンなるが故にキャラバン中は自炊すると父親に約束して出発する。しかし実際はシェルパの食事に舌鼓を打ちながら、毎日を愉快に過す青年コパール。

首都カトマンズよりわずか数日の Caravan で来たこゝいらの現地人。畑を耕し、木を切って毎日を送る原始生活。恐らく言葉も通じないのだろう。それにしても眼の前

を通り行く数度の Expedition にどういう気持だろう。まさに“対岸”の火事なんだろうか。そして朝、夕、何を考えているんだろう。米を運び、塩を送るクサイチベット人の行商。

診察を受けにくる汚い土人。すでに末期症状の先天性梅毒児、たとへ成長しても失明し、鼻孔は閉じる畸型になるだろう。二ヶ月も便通が無いという老バ。二ヶ月という勘定をどうしてしたのだろう。

地図を展げ「未開」「原始」という事に気付けば総てがその通りなんだ。Operator が無線機を持って住んでいる事も。

しかしこれからの文明開化は？

ジャガートよりモンスーンルートの高巻き路。又雨がポツポツ降ったり止んだり。晴れ間、青空のバック、頂に雪をつけた白い峰、そゝり立つ両岸の岩壁、ゆるやかな緑の傾斜に草をはむ牛の群。絵に見るアルプスの風景そのままだ。それを前に食う昼食の美味い事。

日が落ちて星々がきらめき出した。対岸高く青白い雪が皓々と Skyline を見せてくれる。

○

ニヤック出発の時、松田、山野井と三人でキャラバンを離れて裏山に登り、ヒマルチュリーを始めて見ました。中々壮観でした。

『きまぐれ帳引用：――キャラバンに遅れてつまらぬ事をしたと後悔する矢先、稜線チョルテンのある所に出て驚いた。丁度シネラマ映画の始め、イントロダクションに次いで画面が展ける如く、左から右に殆んど視野一杯の広さに、雲一つない眞青な空、ギラギラ輝く氷の峰々、峨々とせまる黒い岩壁、そしてその下にはチューリン・コーラと左右より描く緑のカーブ。

ルピナ、バウダーピーク、眞中に一際白く高くあたりを圧する如く聳え立つヒマルチュリー、右には東尾根が幾つかのスパイクで稜線を画している。我が目を疑い、ボー然として眺めることしばし。更に左に眼を転ずると、深々と緑につゝまれた、白きブリガンダキの流れを越えて、ガネッシュのランプーが、之又緑の上に白い頂を見せている。カメラを撮し、スケッチする。時間がないのが残念‥‥』

始めてヒマルチュリーを見た時の印象です。

ナムルーでは大したトラブルもなく 150Rs とナムルー村民を Porter にするという条件で入山出来ました。四月四日にテランの谷に入ったわけです。

『氣まぐれ帳４月４日一部引用：――

ニヤック、ナムルーの米は石と「もみ」が多い。今日の夕食はラクパ・テンジンが之を選り別けたせいか、或は、ナムルー問題が思ったよりスムースに行って今、山懐、雪を身近にしたせいか、特に美味かった。

１、チキンスープ　２、チキン、サヤエンドー（乾燥）、人参（乾燥）、ジャガイモのシチュー　３、モミや石の殆んどないライス　４、ジャパニーズ・ティー（レモン・ティーにしてスイートミン・Ｆを入れる）　食後キャンプ・ファイヤーで暖る。

（小生のテントには石坂、木村、山野井、住吉の四人）

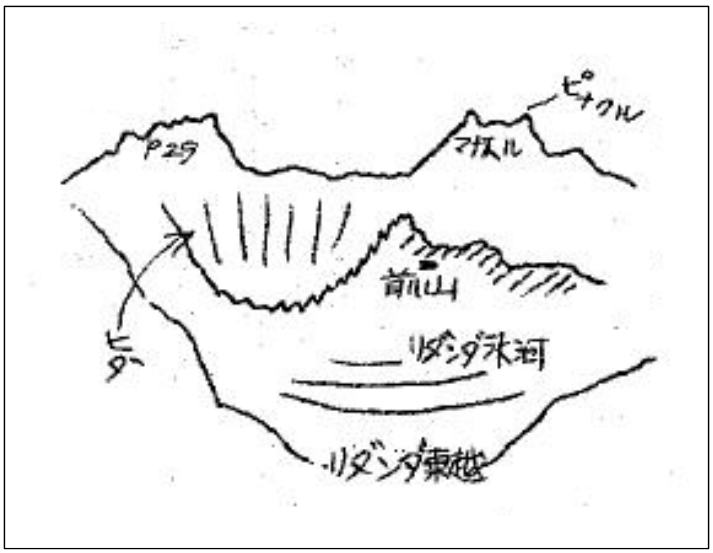
午後九時、木村風邪気味（ヒベルナ四錠、ダブル・シュラーフにする）

山野井“腹減りませんか？住吉さん”住吉“俺もへった”木村“食いすぎて腹にもたれる”石坂はすでにグーグー』

四月五日　村木、石坂、私、ガルツェンでシュランB･C偵察。

四月六日よりシュランB･C建設、八日殆んど完了。

四月九日　村木、石坂、住吉でリダンダ乗越C1偵察。



快晴でマナスル、P29 がよく見えました。P29 はマナスルかヒマルチュリーの稜線伝いならとも角、東面は完全に垂直な壁です。この尾根も垂直に近く、且前山との稜線は細く痩せてギザギザです。

四月二十日　C1テント建設（村木、石坂、住吉、竹田泊る）

四月十三日　C2偵察及テント一つ建設（村木、石坂泊る）

小生不思議な位、頭痛その他の症状が出ません。このまゝ上に行けるものか、或はもっと高い所で高山病症状が現はれるのか？

○

毎日元気でヒマラヤの景色をあかず眺めています。こゝベースキャンプには春が訪れ、一日一日と雪も溶け、桜草や可憐な花が咲き出しました。ブリガンダキ（大きい谷川）の上にかゝった春霞も足下に見下され、その遙か彼方には白い雪と氷河、黒い

岩のヒマラヤ連山が、黒ずんでさえ見える青空に、槍の様に鋭いスカイ・ラインを見せています。

C2 建設も完了、C3 偵察とキャンプサイト決定も 22 日、村木、石坂、私と三人で済し、一昨日、昨日と B.C へ降って休養しました。今日再び登ります。今度 B.C へ降って来る時（五月廿日～廿五日位）は成否も決定している筈です。

今後は

A 班　松田、竹田、ガルツェン、グンヂー、もう一人

B 班　村木、田辺、ニマ、テンジン、他シェルパ二人

C 班　住吉、山野井、ダワ・トンダップ、他シェルパ二人

D 班　石坂、他シェルパ三人

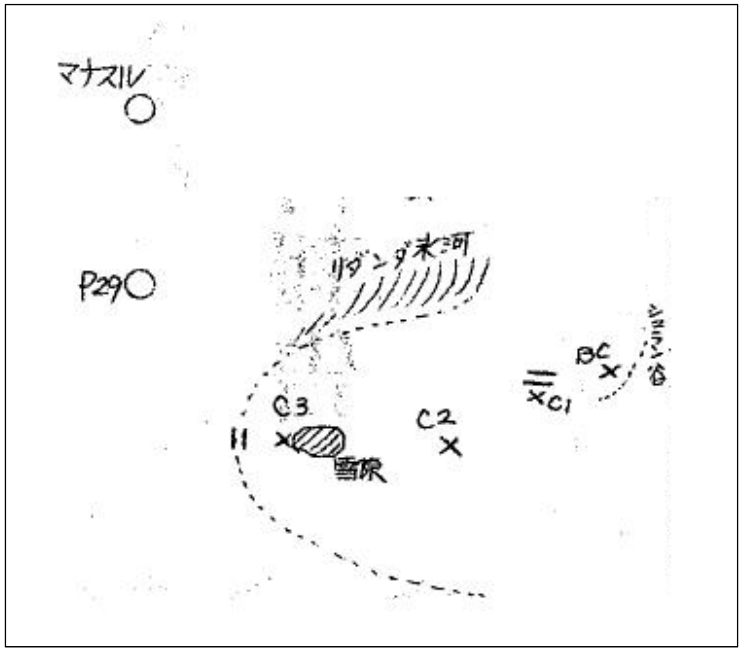
E 班　木村、アン・ダワ

に分れて行動します。次の第三段階は C3 への荷上と C4 偵察及び決定で、五月四日頃 C2 に下って集まります。

C3 はヒマルチュリを眞正面に見る中々よい所です。間に大きなギャップ（リダンダとチューリン・コーラの氷河の分水嶺）がるので C4 は C3 より低くなるのではないかと思われます。例のジャンダルム・トラバースは実際は何でもなく通過しました。しかし、最後の壁は思ったよりすごいですが、眞正面から見てるので、傾斜は分りません。C1 よりみたマナスルのエプロンも中々急傾斜です。

C3 は約六三〇〇米。唯今の所、私不思議な位高度の影響は全然ありません。反って気味悪い位です。

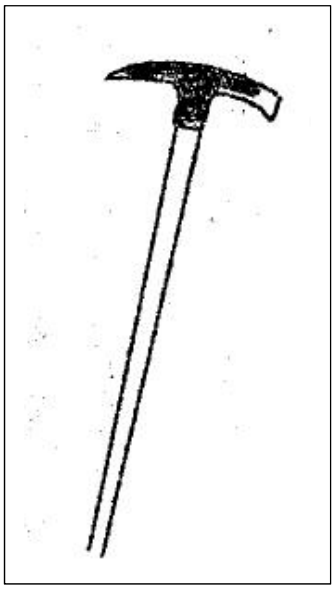
今年は気候が遅れているらしく、20 日計測では、朝六時半頃 B.C-4°　C1-13°　C2-25°といった調子です。しかし、一昨日位からは快晴が続き、本調子になった様子です。



只今丁度ポスト・ランナーが来ました。手紙を受取り、皆それぞれそわそわしています。が、これから C1 に A・B・C 班は登るのであわたゞしい眞最中です。

私にはたった一通しか来ていないので、アッサリ登って行くべく“Let’s go”

と威勢よく声をかけていますが、誰も応じるものもなく、再び腰を下して筆を執りました。



一九五八年度

一般山行報告

剱岳池の谷左俣

期間　　4 月 27 日～5 月 3 日

メンバー　　西川 OB、兼清、野田

4 月 27 日（曇後晴）　10.50 伊折発、13.00 ゾロメキ発電所、13.25 発、13.55 馬場島荘（泊）

富山地鉄上市駅からバスで伊折へ。ゾロメキ発電所で入山の登録をする。馬場島荘は上市町営で新しくきれいである。まだ無人。

4 月 28 日（快晴）　7.30 出発、13.40 池の谷出合滝偵察の後、14.25 発、16.30 キャンプ

白萩川の S 字峡附近で河原が切れ、10 時から 1 時間、草つきとガラ場の大きな高捲きを強いられる。池の谷出合は深い廊下で大滝の処では大きなクレバスができている。暗い廊下が明るく展けると、眞正面に左俣がまっすぐ三の窓へとつき上げている。夏には出合からここまで、小窓尾根を捲くそうだがそのルートはよくわからない。池の谷を通じて一ヶ所だけテントをはれる所があり、キャンプする。

4 月 29 日（晴）　7.20 出発、8.45 二俣、9.15 出発、15.10 三の窓（泊）

今日の目的地は目前に見えているだけに始末が悪い。谷の両側は見事な垂直の壁であるが全体の感じは明るい。斜面はかなり急で、うっかりザックをすべらせようものならたちまち一日分逆もどりである。三の窓の夕日が美しいと聞いて来たが天候のせいか、大したことはなかった。

4 月 30 日（晴）　9.15 出発、13.25 池の谷コル、14.10 発、14.05 剱岳頂上、15.15 発、16.25 池の谷コル、17.05 三の窓

帰りは早月尾根を下ることにし、空身で頂上往復、まず明日に備えて三の窓から池の谷コルまでの急なルンゼをステップカット、バケツステップを切る。稜線からの当

面はすばらしい。八ツ峯を縦走しているパーティが見える。相当手こずっているようだ。

5 月 1 日（雨）　停滞

　前夜から風雨。ナイロンテントでは全く無力で風上の野田のシュラフはビチャンコ。

5 月 2 日（曇後晴）　6.50 出発、池の谷コルへ二回ボッカ、9.35 池の谷コル発、10.20 長次郎コル、11.30 頂上、12.40 発、14.45 早月尾根二六〇〇m 附近（泊）

　剱岳頂上には弥陀ヶ原から大勢の人が来ている。早月尾根の岩場は割合簡単に通過するが、雪が完全にくさっていて一歩毎に股までもぐり、業をにやして早々にテントを張る。夜快晴となり、満月がこうこうと照り、黒い岩と、青白い雪がするどいコントラストを見せている。忘れ得ぬ夜である。

5 月 3 日（快晴）　7.00 出発、11.35 馬場島荘、昼食、14.00 ゾロメキ発電所、15.35 伊折

　予想通り、朝の雪はすばらしくしまっていてアイゼンが快適にきく。威勢よく下っていると松尾平でちょっと迷ってしまう。馬場島はすでに暑く、三日連休の初日なので登山者が多い。　（野田）

千丈沢から双六

期間　　4 月 27 日～5 月 3 日

メンバー　　乾、米林、平田

　烏帽子－立山の縦走計画をたて、それは計画としては良いものであったが、実際に行けたのは双六小屋までであった。限られた日数にしては計画が過大であったこと、三ツ俣－太郎間を軽視して荷を軽くする為にテントを持って行かなかったことが失敗の原因であろうと思われる。

4 月 27 日（曇のち雨）　七倉 8.30－中食 30 分－濁小屋 11.00、天気が崩れそうなので日を稼ぐ為に湯俣から伊藤新道を三ツ俣小屋に行くことにする。雨に降られる。12.00－第五発電所 13.30

28 日（晴）　6.30 出発、新婚旅行にでも来たい様なロマンティックな水俣川を湯俣まで行く。中食 1 時間、千天の出合 12.20。千丈沢は雪がべっとりとついている。双六小屋に今日中に入ることは不可能故、森林限界に荷をデポして今夜は出合で一夜を明かすことにする。星空を寝ながらにして見ることので来る屋根だけのある絶好の露営地を恵まれた。13.30－デポ地 4.30－出合 5.30

29 日（曇のち晴）　6.00 発－デポ地（7.45～8.00）。アイゼンが良く効いた。稜線は予想外に雪が多かった。双六小屋 18.25 着。
30 日（雨）　停滞。太郎から一パーティ入っていた。雪が多くて太郎から二日を費やした由。勿論ビバークの用意はして来たが雨にたゝかれるのを嫌って今回は断念することにする。
5 月 1 日（晴）　相変らずこゝは風が強い。日も余ることだし気前よく晴天停滞にする。
2 日（晴）　大ノマ沢を下る。昨年の冬に苦しんだこの沢も今は一本の木も出ていない。中島さん宅に泊めてもらった。6.35 発－中尾 12.55.
3 日（晴）　このまま帰るのは惜しいので米林と二人で中尾峠を越えて上高地に行く。ずっと雪はついていた。　（平田　彰）

大峰・中ノ川

期間　　4 月 29 日～5 月 3 日
メンバー　　山本、田端、他一名
4 月 29 日（曇）
　9.10 五条（バス）12.15 旭橋、14.05追（セ）部落者部落の長老弓場（ユベ）氏を訪ねて谷の状況をきく、13.00 空身で旭ノ川上流カシノ木淵あたりまで偵察したが水量多く、その上左岸の道路工事の爲遡行不可能、16.30 追部落対岸の地蔵小屋にて露営。
4 月 30 日（曇）
　6.50 出発、9.50 矢筈峠、11.05 モヂケ小屋、13.00 昼食後中ノ川を下流へ向う。足袋にわらぢばきの渡渉は快適だ。
13.30 牛鬼滝、右岸を 30 米あまり高巻きする途中山本鹿の角を拾って大いに悦に入る。14.40 極楽の滝、右岸の壁にあるバンドに上りその切れた所から懸垂下降。15.45 地獄滝左岸の踏跡を下りる。16.05 出合の滝着、30 米ぐらいの滝で旭ノ川本流に落ちている。対岸も 30 から 40 米ぐらいの壁で、谷はせまく樹木がおゝいかぶさっていて陰うつな感じだ。16.15 来た道を引返す。17.30 モジケ小屋。
5 月 1 日（曇）
　8.00 出発、右岸の小径をゆく、11.15 下辻山道に迷いこむ。昼食後引きかえして再び谷へ下りる。このあたりは下流のように大滝こそないが至る所にトロがあり亦小さい滝の連続で、岩登りもせねばならず容易に進めない。3 時になっても尾根にとりつく道が見付からなかったので黒ナメ八丁の手前から右手の槍ノ尾めがけて強引にやぶこ

ぎを始めた。一時間半あまりで稜線につく。17.10 槍ノ尾三角点の約 1km 南方の鞍部にある旭企業伐採小屋につく。今夜はここで宿めてもらう事にした。

5 月 2 日（雨後曇）

8.00 出発、930 七面山頂、11.30～12.30 楊枝宿、16.05 釈迦岳、17.10 前鬼（キャンプ）

5 月 3 日（曇後晴）

8.00 出発、9.30 牛抱峠、11.00 前鬼口（バス）6.30 近鉄大和上市駅。　　（田端）

中央アルプス

期間　　5 月 1 日～5 月 4 日

メンバー　　大島、広瀬、村井、三宅、佐藤、杢中 OB、片山 OB、他一名

5 月 1 日（晴）　10.00 上松駅発。12.13 敬神の滝。小屋あり。13.00 出発。14.30 四合目。1545 五合目。金懸小屋着。淡く霞んだ御岳がどっしりと根をおろしている。キリマンジャロのようだ。

5 月 2 日（高曇）　8.15 出発。8.30 胸つき八丁。名称ほどのことはない。9.50 天の岩戸、七合目。この附近から雪あり。11.05 八合目。13.20 玉の窪。14.40 宮田小屋着。小屋の中には雪が充満していた。

5 月 3 日（晴）　6.20 出発。6.33 宝剣岳頂。10.10 桧尾の頭。夢のように甘美な緑の沢がいくつもある。14.45 殿越小屋。16.45 空木岳頂。17.15 空木小屋着。この小屋は沢の下部にある。ひどい小屋だ。中は雪で一杯。這松敷いて寝た。

5 月 4 日（雨後晴）　10.00 雨をついて出発。11.30 迷尾根、雨止む。信大演習林があった。14.45 功石着。バスで赤穂へ。全般的にスケールが小さく、激しいアルバイトは強いられない。アイゼンは遂に使わずにすんだ。比較的楽に行けるが、グッと胸に来るものがない。　　（佐藤）

鈴鹿山行

期間　　五月一日→四日

メンバー　　木村、大工原、錦田、比嘉、北橋、中村、保田、星野

5 月 1 日（くもり）

8.27 湊町発、10.40 四日市に着く。四日市より湯山行電車→湯山、そこでバスにのり 13.00 奥湯山、13.00 奥湯山発、15.00 テント地

5 月 2 日（雨後曇後晴）

6.00 起床、雨の為停滞、10.00 天気回復、11.00 出発、12.10 昼食、13.20 御嶽神社、15.00 武平峠、16.20 テント地

5 月 3 日（曇後晴後雨）

6.30 出発、コリイ谷を通り、8.40 根の平峠、7.30 羽鳥峯、12.00 釈迦岳－13.30 八風峠、14.00 下の河原にて幕営

5 月 4 日（小雨後曇）

7.00 出発、8.20 田以橋、8.40 トラックをつかまえ、9.00 田光着、9.40 バスにのり、11.15 四日市　　（木村）

立山一ノ越　前穂高岳

期間　　7 月 28 日～8 月 4 日

メンバー　　平田、平野、村井、谷垣、錦田、酒井、中村

7 月 28 日（曇風強し）　合宿が終ってからも天気がぐずついている。今日は何とか持ちそうなので出発する。五色で天候の回復を待つことにする。全員体がなまってしまっていて苦しそうだ。浄土に立つと展望が開け、これから行く山がずっと続いている。雷鳥荘 11.30－室堂（12.20～1.10）－一ノ越 2.20－浄土 3.20－ザラ峠 5.40－五色 6.10

29 日（曇のち晴）　体の調子が回復していないのと、メムバーが三人減っていて荷が重いのとで相当時間を食った。越中沢で飯を食ってのんびりと休む。五色 8.10－スゴ 16.15。ここの水の悪いのにはまいった。

30 日（晴）　始めて薬師を見て以来何時も登りたいと思っていたが、夏の薬師には期待を裏切られた。太郎平はロマンテイックで良い所だ。可憐な花や草を踏みつけねばならないのが残念だった。スゴ 7.30－北薬師（10.30～11.20）－太郎 14.45

31 日（曇・ガス）　途中道がわからず時間を食った。太郎 7.00－昼食－時間－黒部五郎を少し下りた処の沢でテントを張る。良い処だ。3.25。

8 月 1 日（雨のち曇）　食糧は充分あるし、雨の中を歩いていても何も見えないし面白くないので停滞。

2 日（曇・ガス）　ガスの切れ間に雲の平らが見えた。途中槍へ行くという人が逆の方向にやって来た。双六の池迄一緒に行く。出発 7.30－五郎小屋跡 8.30－三ッ俣頂上（10.30～11.00）－双六 13.00

3 日（晴後曇）　久しぶりで晴れた。槍の上で通って来た山々は一望のもとに開けた。キレットは少々厭な所である。双六ノ池 6.00－中食（9.00～9.30）－槍（10.00～11.00）－昼食半時間－北穂 17.00

4 日（晴）　昨夜石のゴロゴロした処で寝たので体のあちこちが痛い。さすがにこの辺は人が多い。前穂目指してガチャガチャ飛ばした。薬師を思い、太郎を思い、回想しつつの下山は楽しい。北穂 6.45－中食 40 分－奥穂 10.30－前穂 11.45－上高地 16.30

（平田）

剱－雲の平－烏帽子－白馬

期間　　7 月 27 日～8 月 10 日

メンバー　　田村、笠松、玉井、田井、打出、長谷川、吉本

7 月 28 日（雨後曇）　合宿を終え房治温泉で待機していた我々の出発は悲観的であった。数日来の雨果てることもなく、耐風さえ接近しつつある。皆風邪気味でかなり動揺している。前沢は発熱、丸尾は父危篤の電報で下山した。追分と天狗に預けた荷は既に昨日房治に集結したので明日こそはとりあえず一之越まで出ようと決めた。夕方立山が見事な笠雲をかぶって見せた。

7 月 29 日（晴）　8.30 出発、薬品を少々買入れる。前沢下山。11.05 一之越、嘘の様に晴上る。皆の同様はどこえやら進め進めとはやりたったがまもなく十貫近い重荷に喘ぎ初め、五色では全く腰を抜かした。17.00 着

7 月 30 日（快晴）　6.40 出発、薬師の巨大な山塊、遙るかな雲平にひかれつつ 13.00 スゴ乗越、頼みのスゴには赤濁した池しかなかったので小屋の主人に天水を分けてもらう。ここで千住からスゴに至るボッカルートのあることを知り、これにヒントを得た玉井以下秋の偵察が後に上廊下横断の一助となった。二ピッチ先の雪田は絶好の露営地で賑わっていた。16.00 着

7 月 31 日（小雨後晴）　7.00 出発、10.20 霧雨の中、荒れ果てた薬師の祠にもうでた。坦々たる下り、太陽がさし、霧の裂け目に現われた薬師沢周辺の山々の雄大な曲線に目を見張った。槍穂剱の神経質な突起しか知らぬ我々は、このようなおおらかな山容に心温まる思いをしたのである。太郎兵衛手前の森林で水をくむ。13.30 太郎小屋、上岳寄りの尾根から中俣に下るが河原の不明瞭な踏跡に捗らず。16.30 右俣出合の砂州上にキャムプ。

8 月 1 日（晴）　11.00 出発、左岸の段丘伝いに源流との出合へ。関電の調査班の天幕に出合う。最初の案では源流を溯行する積りであったがルートが分らず取止め。樅の林に囲まれた芝生とお花畑のカベッケ原で 16.15 キャムプ。

8 月 2 日（晴）　8.30 出発、出合の左岸寄りに難なく渡渉した。（9.10）水は膝まで。雲平への取付きは出合の正面、注意しないと見過す様なごく小さい涸沢、一ピッチで

粗雑な切通しに入る。森林中の急坂二時間、急に明るい芝生に出た（11.30）小粋な榧松と池塘は奥の日本庭園らしい。皆芝生をころげ回って喜こんだ。爺岳下でキャムプ。
8 月 3 日（晴）　予定の晴天停滞の日である。田井、打出、長谷川は高天原へ。田村は源流を下り祖母谷をブッシュにひっ掻かれながら溯行。玉井、吉本はコバイケ草の群落の中をほっつき廻り、笠松は指傷の化膿を一日中いじくっていた。
8 月 4 日（晴）　7.20 出発、縦走の後半に入る。16.30 烏帽子小屋、贋烏帽子の下で露営。赤濁した池、糞尿臭い芝生。一年は明日ブナ立を下る。彼等のハシャギ様に較べて二年は滅入りそうな気持であった。
8 月 5 日（晴）　7.30、荷を整理し一年に託して徹底的に軽くした。南沢から直接針之木へ出て一日かせぐことも考えられたが完走することにする。8.30 南沢、10.30 不動、低い山は蒸し暑く、小きざみな登り降りの連続に水もなく消耗した。然し、低山性のお花畑と針之木南面のボリュームは圧倒的だ。小さな船窪小屋の歓迎は一杯の水であったが実に嬉しかった。16.35 着。
8 月 6 日（晴・ガス）　7.30 出発、12.30 蓮華、13.00 針之木小屋、気のふれた登山者一人、針之木小屋の主人を手こずらせていた。自分を山の超人と妄想してろくな装備もなく、米に塩で出かけるという。頼まれてなだめているうちに時間がたち予定の新越迄望むべくもなく、スバリ間のコルに泊る。15.40 着。一晩中黒部から工事場の響きがこだました。
8 月 7 日（晴）　7.00 出発、10.10 新越、13.30 種池、19.15 冷、ひねもす立山剱と再会を懐かしんだ。水筒 2 ヶづつ用意したにも拘らず水に窮し岩小屋沢手前、信州側の小雪田で火を起して水を作る。16.40 釣尾根三千米に近いすごみのきいた露営地である。
8 月 8 日（晴）　10.10 発、11.10 切戸小屋、14.40 五竜、17.00 五竜小屋。キレットは噂程でもないが、五龍附近の悪路は疲労の色濃い我々には過酷であった。五龍小屋でへばったきり、ズルズルと露営してしまった。五龍東面に大きな V 状の雪渓があるが道から遠く利用する人は少ない。
8 月 9 日（晴）　7.30 出発、9.50 唐松、17.50 キャムプ
　親しい山仲間とはいえ毎日鼻をつき合わしているせいか、この頃よく悶着が起る。が、これも今日で最後だ。不帰は大変な人ゴミ。うすぎたない我々を振り返っては、名誉あるズボンの大穴を笑う。天狗を登り切るといままでの疲れが一度に出た。朦朧とした足取りで村営小屋裏にたどりつく。とっておきの御馳走で成功を祝った。

8 月 10 日（曇）　12.20 発。13.40 猿倉。御来迎を迎えるキャンプ群の大騒ぎにたたき起され、白馬の主峰は又の日と、大雪渓の群衆を蹴散らさんばかりに猿倉へかけおりた。与兵衛氏宅の銀メシと青菜に蘇生の思いをする。　　（田井、田村）

針の木岳－白馬岳－朝日岳

期間　　8 月 4 日～8 月 9 日

メンバー　　野田、佐藤、三宅、森田、西垣、金子

8 月 4 日（曇後晴）　7.05 大町発＜バス＞7.50 扇沢出合着。9.00 出発。13.35～14.50 針の木峠。15.45 針の木ピーク、16.24 針の木・スバリのコル、泊。信州側の雪渓から僅かに水が流れている。

8 月 5 日（晴）　6.30 発。6.45 スバリ頂。8.12 赤沢頂。9.30 鳴沢頂。9.40 新越乗越。10.25 発。11.10 岩小屋沢頂 12.05～12.30 残雪。12.50 種池。15.16 冷池。17.18 鹿島南槍。18.00 吊尾根、泊。信州側の雪渓から水をつくる。

8 月 6 日（晴）　8.05 出発。北槍ピークを経て、9.15 キレット。13.30 五竜頂。18.08 唐松小屋前。18.30 泊。黒部側の雪渓に水が豊富にある。

8 月 7 日（晴）　8.20 発。8.33 唐松頂。13.58 白馬鑓頂。15.00 白馬、泊る。水の心配なし。

8 月 8 日（晴）　7.30 発。8.10 白馬頂。8.40 三国境。10.18 雪倉頂。10.50～12.15 長い昼食。14.25 朝日頂。15.20 朝日小屋。この日以後水の心配なし。

8 月 9 日（晴）　6.35 発。9.20～11.00 北又谷で昼食。11.35 越道峠。13.38 小川温泉着→泊駅。連日、頂上は晴れていたが信州側は蒸暑い雲が垂れこめていた。白馬迄は水に苦労した。露営地の他は殆んどない。新越乗越には水はない。（余りガイドブックをあてにしないことだ）種池は汚い。種池手前の残雪にはきれいな水が流れていた。また、五竜小屋裏の雪渓にも少し水があった。冷水の水はその気になれば飲めるだろう。後立は黒部側に緩く信州側に鋭い。道は主に黒部側をまいている。進むにつれて変貌する剱の姿が美しい。白馬から北は全体に緩く斜面が曲折し牧歌的でロマンチックだ。雪渓も多く水の心配はない。高山植物も咲き乱れている。人間にも殆んど会わない。北進するにつれて僕等は夏から春へゆく。例えば、杓子附近から雪渓は次第に数と大きさを増す。針の木で醜く枯れていたコバイケイソウも冷池附近から花をつけ初め、朝日岳では白く綺麗に咲き揃う。　　（佐藤）

北岳－間ノ岳－農鳥岳

期間　　8 月 4 日～8 月 9 日

メンバー　　大島、広瀬

8 月 5 日（晴後曇）　7.35 日野春発＜バス＞8.00 白須発、8.20 竹宇発＜トラック＞9.50 駒ヶ岳神社発、13.50 笹ノ平発、15.15 三宝頭発、（・一八七三）、15.50 刀利天狗、16.40 五合目小屋着。駒ヶ岳神社から 3 時間の笹ノ平に水量の豊富な水場あり。

8 月 6 日（雨曇雨）　6.30 出発、晴れたので出発する。7.45 七丈小屋、10.00 駒ヶ岳頂上、ガスの為視界きかず、チラッと北岳が見えただけ。11.15 出発、11.50 六方石。12.25 駒津峰、13.30 仙水峠、小雨が降り出す。14.15 出発、15.30 常火山、16.55 アサヨ峰、相変わらず雨が降り時間も遅くなったので、腹ごしらえをする。

17.40 出発、20.10 早川尾根着。駒と六方石の間及びアサヨと早川尾根小屋の間に水場があるらしいが見当らず。

8 月 7 日（晴）　8.40 出発、9.00 広河原峠、10.50 広河原小屋、峠からの下り道はとても悪い。夜叉神峠より広河原へ道を作っているのでやがて第二の上高地になるだろう。いい河原である。12.05 出発、14.35 白根御池小屋着。眼前に北岳が聳え、左には鳳が見える。池あり林あり、ロマンチストなら詩も生まれよう。

8 月 8 日（晴）　4.00 出発、6.00 小太郎尾根、バットレスがよく見える。7.18 北岳頂上、千丈、駒、富士をはじめ、北ア、中アも見える。8.00 出発、10.15 間ノ岳、ガスがかかり出す。確かに迷いやすい処である。先行の人が誰かが先に行くのを待っている。

11.15 農鳥小屋、尾根小屋今年新設、12.00 出発、12.45 西農鳥岳、13.20 東農鳥岳、14.00 大門沢新道入口、17.15 大門沢小屋着。

8 月 9 日（晴）　4.45 出発、8.10 奈良田、9.40 出発＜バス＞12.23 身延着、12.38 出発富士経由で帰阪。

　南アルプスを知る為に、最もポピュラーな処をえらんだ。水は 2ℓのポリタンク一つあれば充分である。スケールの点では北アルプスなどの比ではない。マウンテンガイドブックシリーズはなかなか参考になる。　　（広瀬）

薬師沢から雲の平

メムバー　　米林他一名

期間　　8 月 11 日→8 月 18 日

8 月 11 日　20.09 大阪発

8 月 12 日（曇後雨）　9.40 猪谷－11.30 有峯（山越氏宅で昼食）－12.40 有峯発－15.40 小畑尾峠（真川峠）－16.00 真川（泊）

真川峠より豪雨となり全身、テントずぶぬれになる。

8 月 13 日（小雨）　4.00 起床－6.55 出発－8.30 森林限界－10.15 昼食－11.20 太郎兵衛平

天候悪化の為午後は停滞。

8 月 14 日（ガス・小雨）　4.00 起床－7.00 出発－11.40 薬師沢、黒部川出合

8 月 15 日（曇時々雨）　6.30 起床－8.30 取付のルート偵察－11.00 左岸の〇渡渉－12.30 出発－2.30 雲の平末端－15.30 キャンプサイト

8 月 16 日（ガス後晴）　6.00 起床－8.00 出発－11.00 ワリモ乗越－12.10 赤岳－15.00 野口五郎－17.35 烏帽子

面白いコースを選んだつもりだったが、雨ばかりでさっぱりであった。黒部川の思わぬ増水のため非常に危険な目にあった。即ち黒部は薬師沢出合のところで直ぐに渡ればよいものを太郎の小屋の親爺に少し下流だと聞いたものだから小雨の中をずっと下流迄下り、合流した他のパーティの一名と計三名で偵察のため渡渉して対岸のルートを調べていたところ急に増水してしまい、帰れなくなってしまった。しかたなく両岸に分れて寝たがあの附近はひどいブッシュでテントを張るところがなく屋根だけ残った小屋に泊った。

雲の平は静かで気持よかったが天候が香しくなかった。雲の平から烏帽子行く日から天候は回復したが、残念ながら下山した。どうも八月十日～二十日の間の天候は香しくない様だ。　（米林）

薬師岳・金作谷　（春山のための偵察行Ｉ）

メンバー　山本信樹、田端剛爾

期　日　58 年 8 月 11 日～19 日

11 日（晴時々曇）　20.10 大阪発

12 日（晴後時々雨）　9.15 追分発、12.05 室堂、14.25～15.20 富大小屋、18.10 五色小屋近くにてキャンプ。

13 日（曇後雨）　8.30 出発、11.10 越中沢岳、15.00～17.05 スゴ小屋、17.20 小屋の少し上の所でキャンプ。

14 日（雨）　9.15 出発、13.10 北薬師、14.30 稜線より 10 分あまり金作を下りてキャンプ。

15 日（雨）　停滞

16 日（晴）　四日間降り続いた雨もやっとあがった。初めてみる薬師の全貌だ。キャンプサイトはちょうど金作カールの中だった。9.15 出発、テントのすぐ下で谷は小さく落込んでおりそれから十分程は大きな岩石ばかりの広い平な沢だ。所々に水も流れている。まもなく密生した偃松にぶつかった。ここで谷は大きく落ち込んでいる。はるか下に金作谷の雪渓がわずかに右にまわりながら横たわっている。偃松の南側にある急な狭いガレを 50 分下ると最後に小さい滝があってその下から出合迄きれいな雪渓がつづいている。そのちょうど中間で北薬師から出ているかなり大きい沢が入っている。赤茶化た急な沢で滝が二つ見える。11.30 出合到着、案外明るい感じで本流は出合のすぐ上下で約 20 米程の壁になっているが簡単に河原に下りる事ができた。

12.30 本流を上流に向って出発、左岸を 1 時間高まきして河原に下りる。川はすぐトロになっていて少し左にまわっている。10 分あまり左岸をへつり浅瀬をみつけて渡渉、このあたりから谷は少し開けてくる。更に 20 分右岸をへつると谷はかなり明るくなり薬師側から V 字型の沢が入ってくる。赤牛側の尾根もゆるやかとなる。15.00 赤牛沢の少し手前で引き返す。16.00 金作出合、19.20 キャンプ。

17 日（晴たり曇ったり）　7.40 出発、9.30 出合下流へ向う。出合のすぐ上で右岸へ渡渉、すぐ中州へ。次に右岸に。いずれも膝より少し上程度の渡渉である。右岸を 20 分へつり、谷が左にまわって滝になっている所で約 20 米上の岩棚へ登る。そこを 30 分下ると谷は大きく S 字状に曲っている。このあたりは水量も多く両岸はせまり陰うつな感じだ。赤牛側に沢はなく、薬師側の沢は全て滝となって本流に落ちている。こゝから一時間大きく高まきする。やがて正面に三百米はあろう黒い岩壁がみえてきた。上ノ黒ビンガだろう。13.00 スゴの稜線をみて引返す。13.30 少し気のゆるんだ時だ。なんの気なしに足をおいた草付が実はその下に水が流れていた。あっというまにスリップしてしまった。14.10 ザイルで導かれながらやっと歩き始めた。16.30 金作谷出合。19.40 キャンプ、苦しい 6 時間だった。

18 日（晴時々曇）　8.30 出発、9.30 薬師岳、12.30 太郎小屋、16.15 折立（ジープ）18.50 小見

19 日（晴）　8.00 大阪着。　（田端記）

屋久島、宮ノ浦岳

期　　間　　8 月 22 日～8 月 28 日

メンバー　　大工原、他一名

8 月 16 日（晴）　鹿児島着、船待ち停滞 4 日。

8 月 21 日（晴）　鹿児島港発。

8 月 22 日（晴）　安房（あんぼう）港着。トロに乗せてもらえることになり、13.20 トロ終点。途中昼食し、17.25 花ノ江河小屋（無人）着。石造りの良い小屋である。

8 月 23 日（晴後雨）　9.00 小屋発、10.15 宮ノ浦岳頂上着。この頃から次第にガスが上って来た。10.45 頂上出発、11.50 小屋着。小屋で昼食中ついにふりだす。次第にはげしくなり、14 時頃から豪雨となった。この雨の中を、島の人達が 10 人程上って来て台風十七号接近の知らせをうけた。どうせ下っても船はないので小屋に沈澱することにする。

8 月 24 日（雨後曇）　雨は、はげしく小止みになることもない。しかし 14 時頃から次第に小降りになってきたので、パッキングを始める。14.20 花ノ江河小屋発。18.05 小杉谷着。小杉谷は営林署の人達が住んでいる所で、小学校の分校もある。ここに泊めてもらう。

8 月 25 日（快晴）　8.30 小杉谷出発。途中からトロに便乗させてもらい、12.00 安房着。船は欠航なので、小学校の臨時宿直員にしてもらう。すごく暑い夜だった。

8 月 26 日（晴）　11.00 安房港出港。

8 月 27 日（晴）　4.30 鹿児島港着。

屋久島には、千米以上の山が 36 程もあり、日数があればあちこち行ける。岩場も大きなものが永田岳にあるが、記録はあまりない様である。たゞ船の便が悪く、下手をすると四日も待たねばならないこと。一ヶ月の内 35 日は雨だと言われる程雨の多いことなど都合の悪いことが多い。水は頂上付近まで湧いており、水筒の必要もない程である。キャンプサイトは、安房から登れば、花ノ江河附近にしかない。冬は 1m 程の積雪があるそうである。　（大工原）

中央アルプス

期　　間　　9 月 1 日～3 日

メンバー　　五百蔵、他一名

9 月 1 日（小雨）

上松 08.35－敬神の滝 11.00－四合目（昼食）13.20－五合目金懸小屋（泊）14.30

前夜からの雨のため、予定を変更して五合目で泊る。

9 月 2 日（午前中晴、午后ガス）

五合目発 07.15－玉窪の小屋 10.40－本岳頂上（昼食）11.25－本岳発 12.15－宝剱岳 13.03－桧尾岳（泊）16.10

八合目に避難小屋、前岳と駒本岳のコルに玉窪の小屋が新しく建っていた。各山小屋は閉鎖の準備中。縦走路は宝剱の下りが一部ちょっと注意がいるくらいで、なんの変哲もない山道。桧尾岳頂上から東へ 50 米ばかり下った所に避難小屋が出来ていた。数人程度の収容力で、水は北へ 50 米ほど下った所にある。この日はそこへ泊った。

9 月 3 日（晴）

小屋発 08.30－菅ノ合 12.50－（14.00 バス）－赤穂駅 14.30

予定ではこの日に空木岳から下る筈だった。同行者の都合で下山日を延すわけにはゆかなかったので、桧尾の尾根を下る。あまり登山者の通らぬ道だが、避難小屋建設のためのボッカがこの道から行われたらしく、かなりよく踏まれていた。記録はないが、発電所の取入口についたのは、11.30 頃であったと思う。こゝまで来れば人里である。　　（五百蔵）

雪　彦　山

期間　　9 月 1 日～9 月 4 日

メンバー　　打出、前沢、服部

姫路市の北 20 キロにある雪彦は高度感のある岩場をもっている。

9 月 1 日（小雨）

三宮 8.53 発列車姫 10.10 着、姫路 12.20 発山ノ内行神姫バス。雪彦行のバスが出ているが時間の都合で乗れなかった。1.30 山ノ内、雪彦のふもとの坂根部落を通り木馬道を登っていくとシイタケ乾燥小屋があった。泊、2.30.

9 月 2 日（晴）　地蔵岳東西ルート　高度差 250m

6.30 起、7.15 出発、小屋は少し高い位置にあり取付き点まですこし下る。取付点 9.30 このルート下半は傾斜 60°位のスラブでこれを 5 ピッチ半でのぼる。10.50～11.20 昼食。この後オーバーハングを少し巻いて馬の背と呼ばれるリッジへ出る。これを 4 ピッチで登り切り頂上へ出る。（1.50）3 時小屋帰着。

9 月 3 日（晴のち曇）三峯正面ルート　高度差 200m

小屋で荷物をパッキングして出発（7.30）不行沢出合（8.30）ここで荷物をデポする。不行沢からすこし入った所が取付点である。下部 20m はオーバーハングした岩でピトンが多数打ってあるが相当悪くザイルの滑りが悪いのと相まってくたびれた。其後 2 ピッチ、ブッシュを槽いでコンティニアスの後下まで 100m くらい切れた中央壁上部

のテラスへ出る。この上 1 ピッチのオーバーハングはドキドキさせられる。これもすぎるとブッシュ帯でコンティニアスを続けて頂上へ出た、2.00。帰途裏側のルンゼを懸垂又懸垂で不行沢に戻った。出合でテントを張った。

9 月 4 日（晴）

不行沢北壁は手強そうなのであきらめ、撤収する。9.50 雪彦発のバスで下る。

（前沢）

涸沢岳西尾根偵察

期　　間　　9 月 21 日～9 月 23 日

メンバー　　野田、宍戸 OB、他二名

9 月 21 日（晴）　5.50 高山発、＜バス平湯経由＞、9.55 新穂高温泉、11.30 押谷出合附近（スケッチ）、滝谷出合往復の後 15.45 白出沢出合（泊）

9 月 22 日（小雨後曇）　午後涸沢岳西尾根の取付地点偵察

9 月 23 日　8.10 キャンプ撤収、10.10 新穂高温泉

右俣が開けるとジャンダルム飛騨尾根がなぎ落ちた姿がすさまじく仰がれる。西尾根の側面は相当に急傾斜で、全体にブッシュも深い。結局末端から取付くのが白出沢の雪崩をも考慮した結果一番望ましいとの結論を得た。悪天候のため、予定した稜線からの偵察はあきらめる。当初中崎尾根からの偵察も考えたが、地図にある道は完全に廃道となって不可能とのことである。新穂高から一時間上の所にある飯場を BC にすることにし、不充分ながら偵察行を終った。　（野田）

有峰－三俣－赤牛岳　（春山のための偵察行Ⅱ）

期　　間　　10 月 6 日～10 月 12 日

メンバー　　乾、大島、村井、谷垣、丸尾

10 月 6 日（小雨）　6.40 猪谷着、13.30 有峰。土までガソリン軌道それよりトラックに便乗。民家の都合で飯場に泊る。

10 月 7 日（曇後雨）　6.50 出発、10.40 真川峠、15.30 太郎小屋、小屋番不在。

10 月 8 日　5.20 出発、12.00 黒部乗越、19.20 三俣蓮華小屋。

10 月 9 日　12.00 出発、15.30 水晶小屋跡着。

10 月 10 日　6.30 出発、7.00 黒岳、9.30 赤牛

大島、谷垣－赤牛岳北西尾根 P3 より派生する尾根を下る。

乾　、村井－P3 をギャップ手前まで下り、カスミ平の池をみつけ、春には志子まで下れることを確認。（丸尾、テントキーパー）

12.00 赤牛ピーク、17.00 テントに帰る。

10 月 11 日　10.00 出発、12.00 三俣蓮華小屋、15.00 赤沢出合、19.00 取入口（小宮山氏宅に泊る）

10 月 12 日　8.00 出発、13.00 葛、15.00 大町　（村井）

スゴ沢より上廊下偵察　（春山のための偵察行Ⅲ）

期　　間　　10 月 8 日～10 月 11 日

メンバー　　笠松、田井、大工原、玉井、保母

10 月 8 日（曇）　千寿ケ原 08.30、軌道サク谷 10.00（朝食）－北電取入口小屋 11.40－工事場（13.00 昼食 13.45）－スゴ谷右俣出合渡渉（14.00～14.40）－尾根平坦となる（1900m）17.00－スゴ小屋 21.00

10 月 9 日（晴・ガス）　スゴ小屋 14.30－スゴ乗越 15.00－スゴ沢 F2 上 17.10　テント設営

10 月 10 日（晴）　F2 テント 07.00－F2 下 08.35－F1 上（09.20～09.40）－F2 下 10.15－F2 上テント（11.00 昼食 11.00）－スゴ乗越 13.40－スゴ小屋 14.45

10 月 11 日（曇のち雨）　小屋 07.00－平坦な尾根 08.00－スゴ谷右俣出合（岩小屋あり）（09.00 朝食渡渉 11.00）－北電小屋 12.35　笠松、田井は下山、他は立山温泉に行く。温泉は無人、12 日ケーブルと軌道で千寿ケ原へ。

短い休みに上廊下偵察を試みる為、立山の砂防軌道と余り知られていないスゴ小屋ボッカルートを利用した。（このボッカルートは裏縦走の折、スゴ小屋で聞いたものでルートは五十島氏に問合せた）しかし、予想外に時間を喰い、暗闇の中をやっとの事でスゴ小屋にたどり着いた。その為次の日に寝過し出発が遅れスゴ沢 F2 の上でテントを張らざるを得なかった。これは狭い河原のテント地でちょっと雨がふれば水びたしになろう。10 日 F2 を右岸で大きく高捲し、F2 よりかなり下流へ灰色の崩土につたって下った。（F2 は本流と数本の支流により出来ている）ここでスゴ沢は小さいトロになったのでザイルで左岸をへつり次いで右岸を下って F1 上の広い河原に着いた。F1 は真直ぐに 20m くらい落ちて居り両岸は赤いスラブ、右岸が下れそうであったが、時間切れと悪い天気予報の為これ以上の下降を断念した。F1 上からは黒部本流が僅かに望まれ、地図ではスゴ沢出合より約 300m 下流に注ぐ筈の中元のタル沢がスゴ沢出合の真正面に流れこみ、タル沢左岸は出合までゆるいブッシュがつづき右岸は草付と

なっていた。この中元タル沢両岸を形成する左右尾根は共に赤牛台地から黒部へ急傾斜で落ち込む樹木の密生した尾根である。スゴの頭から出合に向って降りている尾根は末端まで針葉樹が生えている。この結果、北西尾根－カスミ平－中元タル沢右尾根→スゴ沢出合－スゴの頭→スゴボッカ尾根のルートで積雪期の横断が可能と思われた。（実際は北西尾根－と中元タル沢左尾根が使われた。）

（玉井）

燕岳－北穂高岳

期　　間　　10 月 8 日～13 日

メンバー　　服部、前沢、打出

コース及タイム

10 月 9 日（晴）　有明 7.30－（トラック）－中房 8.45－燕山荘 12.50－燕岳往復－就寝 6.30

10 月 10 日（晴）　燕山荘発 7.00－大天井 9.00－水俣乗越 12.10－肩の小屋 2.00－槍の穂往復

10 月 11 日（曇）　肩の小屋発 7.00－キレット底部 9.00－北穂高 11.00－涸沢 1.00－徳沢園 3.30

10 月 12 日（晴）　上高地発 1.30（バス）

試験休みでもあり、のんびりした山行を楽しみたいので、小屋泊りとし、サブザックという軽装で行った。

燕の登りは燕山荘泊りという気安さから、紅葉を楽しみながらゆっくりと歩いた。気遣われた天気も好転したし、山は 8 日に降った雪と紅葉で化粧され、何とも云えぬ程、好い気持ちであった。

東鎌で汗をかいた後、槍の穂に登ると、折からのガスに、御来迎が見えた。肩の小屋の夕暮は富士、八ツ、南ア等が雲海の上に首を突き出し、浅間山は、さながら大海原を走る汽船であった。

少し曇った空を気にしながらもキレットを越えた。新雪はまだ淡く、大したことはない。涸沢の紅葉は今を盛りと華を競い人の顔までも黄色く見えた。　　（打出）

木曽駒ヶ岳

期　　間　　10 月 9 日～10 月 10 日

メンバー　　黒木、西垣

10 月 9 日（晴）　上松駅着 9.32　出発 10.00　12.00 敬神滝、昼食　15.00 金懸小屋、泊

10 月 10 日（晴）　7.30 出発　10.30 玉窪小屋、荷を置いて、11.20 頂上、宝剣、伊那前岳往復、15.00 玉窪小屋、泊、玉窪小屋は新築のトタン張、溜置きの水をみつけたので、ここ泊る。夜ふけトタンが不気味に鳴る。

10 月 11 日（晴）　頂上往復、10.00 小屋発　13.00 敬神滝、あけび捜し、二・三個しか見つからず、15.30 寝覚めの床　17.39 上松発帰阪。

試験後の骨休めとアルプス全体の展望を目的としてのんびりした山行を志した。幸い天気にめぐまれ、夏の合宿の時のように、夢中で歩いただけという山行とは、また別の気分が十分味わえた。　　（西垣）

薬師－槍ヶ岳

期　　間　　10 月 9 日～10 月 17 日

メンバー　　広瀬

10 月 10 日（晴）　5.30 富山着、5.50 発、7.00 千寿ガ原着、8.15 発＜トロッコ＞、9.20 寒谷着、10.30 取入口（真川とスゴ谷の合流点）、2.30 下山する田井、大工原君と遇う、3.45 出発、8.00 スゴ小屋。ボッカ道が意外に長いのに驚いた。スゴ尾根からは富山の灯がとてもよく見える。小屋には笠松、玉井、保母がいた。

10 月 11 日（晴後曇）　7.05 三人を送り出して出発、11.25 北薬師岳、太郎小屋がはっきり見える。視界きわめて良好、槍穂には雪がついている。11.40 出発、12.50 薬師崖頂上発、2.50 太郎兵衛平小屋。

10 月 12 日（雨後曇）　停滞。

10 月 13 日（曇後雨）　5.30 出発、7.20 上ノ岳、ガスがものすごく視界殆んど 0。11.00 黒部五郎頂上、12.20 黒部五郎小屋跡、2.10 双六への別れ道、3.30 三俣小屋。朝天気回復に向いそうなので出発したが、上ノ岳を過ぎる頃より、ガスがかゝりはじめ、踏み跡が唯一のたよりであった。夕方雨の中を高橋等が野口五郎より来る。全く奇遇。

10 月 14 日（曇後強風雨）　8.30 出発、10.15 双六小屋、小屋に着くとすぐ強風雨になる。番人はいない、なかなか快適。
10 月 15 日（曇後雨）　停滞
10 月 16 日（曇）　6.00 出発、8.20 千丈沢乗越、9.25 肩小屋。晴れる。穂先へ登るのは三度目であるが、いつ登っても感じがいい。11.15 出発、12.37 槍沢小屋、2.00 横尾、3.53 明神館、4.45 上高地。兼清さんの組とぱったり出喰す。すぐ最終バスに乗って松本へ。
　天候には恵まれなかったが、それだけに得る処が沢山あった。　（広瀬）

裏銀座縦走

期　　間　　10 月 11 日～10 月 16 日
メンバー　　金子、酒井、高橋
10 月 11 日（晴）　8.10 濁小屋前の河原発、15.00 烏帽子小屋、16.20 烏帽子ピーク
10 月 12 日（みぞれ後曇）　僅かの晴間をぬって野口五郎へ、途中何度もブロッケンのおばけに合った。野口五郎は東西に新雪がついていた。
10 月 13 日（曇後雨）　9.00 出発、17.00 三俣蓮華小屋。小屋で広瀬さんに会った。
10 月 14 日（雨）　8.30 出発、10.15 双六小屋。
10 月 15 日（雨・風）　停滞。
10 月 16 日（曇後雨）　3.00 起床、6.00 出発、6.25 モミ沢岳、9.25 肩の小屋、11.15 発、13.00 二の俣、14.00 上高地バス停留所→松本。
穂高の新雪は前日末の雨であらかた消えていた。風と雨のあと洗われた様な紅葉の上高地が素晴しく美しかった。

上　高　地

期　　間　　10 月 14 日～10 月 16 日
メンバー　　兼清
　試験後の 2 日の休みを利用して紅葉の美しい上高地を見に行ったが 3 日間とも雨で秋晴の穂高連峰は望まれなかったが、雨の降る上高地の景色も又良いものであった。

涸沢岳西尾根偵察

期　　間　　10 月 31 日～11 月 6 日
メンバー　　兼清、平野、大島

10 月 31 日　大阪発 6.09

11 月 1 日（曇一時雨）　9.00 上高地発－9.45 明神－10.35～12.30 徳沢（中食）－13.30 横尾－15.00 横尾営林署小舎着。

11 月 2 日（曇）　11.00 出発－13.45 涸沢小舎。

11 月 3 日（晴）　7.00 出発－9.30 穂高小舎－10.45 小舎発－涸沢西尾根上部偵察－12.00 小舎着－12.40 小舎発－13.00 奥穂高岳－13.55 小舎着。

11 月 4 日（快晴）　7.50 小舎発－10.00 西尾根蒲田富士手前 10.20－13.00 小舎着－14.25 小舎発－15.00 奥穂高岳－15.30 小舎着。

11 月 5 日（晴）　8.25 小舎発－8.40 涸沢岳－13.10 北穂高岳南峰 13.50－15.12 涸沢小舎通過－16.45 穂高小舎着－17.00 穂高小舎発－18.30 涸沢小舎着

11 月 6 日（曇）　7.10 涸沢小舎発－8.30 横尾－9.30 徳沢－10.10 明神－10.55 上高地着。

冬山合宿の目標に選んだ涸沢西尾根の蒲田富士よりも上の半分を偵察する目的で出発した。前半穂高小舎に入るまでは兼清が調子が悪く時間を喰った。西尾根はハエ松と岩のミックスした尾根でその上に 10～30cm 程度上の方では 50cm 程度雪がついていた。涸沢岳－北穂高岳の稜線は岩の上に氷が張っていて雪は冬よりもすくないが状態は悪かった。それで大島、平野の二人は帰路北穂南稜を降りさせた。

（兼清）

烏帽子への春山用荷上げ

期　　間　　11 月 1 日～11 月 4 日

メンバー　　野田、山本、米林、田村、佐藤（以上偵察隊）。木村、打出、保母、三宅、佐藤（T）、黒木、西垣、谷垣（以上笠ヶ岳へ縦走）。広瀬、玉井、中村、北橋（以上燕へ）。錦田。

春の上廊下横断計画では稜線上 2540m の烏帽子小屋が BH となったので相当量の食糧装備を秋に荷上げすることにし、春の BH 入りを非常に助けた。（荷上げしたものは春山食糧及び装備の所を参照）

11 月 1 日（曇のち雨）　七倉着 08.30、濁小屋 10.00　荷上げの品は全て 11 時の軌道で上げることにして個人装備で濁小屋へ入った。夕方から雨が振り始める。夕食後荷分けをした。

11 月 2 日（小雨高所でみぞれ）　偵察隊は個人装備他は 20～25kg の荷で出発。雪は三角点附近よりあった。偵察隊を小屋に残して大急ぎで下る。濁小屋 07.30→取付き 08.20→三角点 12.00→烏帽子小屋 14.00→濁小屋 16.15

11 月 3 日（曇）　笠ヶ岳へ縦走するものは個人装備のほか数 kg、他は 25kg を持って出発、早く着いたので十人程は頂上へ行く。雪は 20～30cm。縦走のものを残して夕暗の中を濁に急いだ。濁小屋 06.35－烏帽子小屋（13.00～15.30）－濁小屋 17.40（燕隊は 4 日濁より出発）

出発前は参加予定者が減り、余り天気が良くなく体の不調の者も出たがとにかく 400kg 以上を荷上げした。ケロシン缶の漏れが目立ち春まで持つかどうか心配であった。　（玉井）

烏帽子－笠ヶ岳

期　　間　　11 月 3 日～11 月 6 日

メンバー　　木村、三宅、打出、保母、谷垣、西垣、五百蔵、黒木、佐藤（毅）

11 月 3 日（曇）

6.30 濁ノ小屋発、7.30 滝の上につく。10.10 昼食、30 分休憩の後出発、11.20 三角点以後順調に 13.00 烏帽子小屋につき泊る。

11 月 4 日（快晴）

6.00 烏帽子小屋発、7.30 三ツ岳、10.00 野口五郎、昼食をとり、10.30 出発、13.40 水晶小屋跡、14.25 鷲羽の登り、15.30 鷲羽、16.20 三俣小屋に着く。

11 月 5 日（快晴）

6.40 三俣小屋出発、三ツ俣－双六間は一面の雪であった。8.50 双六小屋着。9.05 双六小屋発、10.55 昼食、11.50 大沼乗越、14.30 抜戸岳→笠の小屋着。

11 月 6 日（くもり後晴）

7.40 笠ノ小屋発、8.00 笠頂上→10.15 水場、12.35 槍見温泉　（木村）

濁　－　燕　岳

期　　間　　11 月 4 日～11 月 5 日

メンバー　　広瀬、玉井、中村、北橋

11 月 4 日（晴）　濁小屋 08.20→東沢 08.50→材木中継所（11.25＜昼食＞12.30）→東沢乗越 16.00→燕頂上 18.45→燕山荘冬期小屋 19.30.

荷上げの為ブナダテを 2 往復したのでかなり疲労していたが好天に励まされて出発。中継所までは順調であったが之からは材木伐採の為荒れ又脇道が多く出来ていて何度も迷った。乗越で疲れた北橋の荷を広瀬が持ち夕暮の中を北燕の登りにかかった。森林帯を抜けると雪が 20cm 位あり歩きにくい。ランプを出し、急斜面をジグザグと上り稜線に近づいた。登り切ると急に視界が開け、針ノ木から双六にかけての山々が深青色の夜空に鈍く光っている。風が吹きはじめ、ピッケルが手に粘り始めた。ランプの光に次々に現われる奇岩に惑わされつゝ燕山荘に急いだ。すっかり冷えて小屋に着きストーブをたいてほっとした。

11 月 5 日（晴）　燕山荘 13.20→中房温泉 15.10＝有明（バス）＝松本

素晴しいモルゲンロートだった。ゆっくり食事をとり出発。雪はすぐ無くなり滑り易い道を中房めがけ下った。夜、松本での一杯は腹にしみた。　（玉井）

秋の黒部上廊下の横断偵察行　（春山のための偵察行Ⅳ）

（赤牛岳よりスゴ沢へ）

メンバー　山本、米林、田村、佐藤

期　間　11 月始めの荷上後 11 月 3 日より出発、荷上の分は省略する。

11 月 3 日（晴）　起床 5.00－出発（烏帽子小屋）7.30－三ツ岳 9.20－野口五郎岳 11.40－昼食－12.25 発－東沢乗越 15.10－水晶小屋 16.40

11 月 4 日（快晴）　起床 5.00－出発 8.00－黒岳 9.30－赤牛岳 15.15－赤牛岳左尾根 P2P3 コル 16.00

11 月の稜線の雪は非常に不安定で行程ははかどらぬ。東沢乗越から赤岳、又黒岳附近には積雪期には相当のフィックス必要であろう。

11 月 5 日（快晴）　起床 5.30－出発 8.30－P39.00－森林限界 11.15－昼食－出発 13.30－三角点 14.35－キャンプサイト 17.10

赤牛以下はしばらくがらがらの尾根で、その後はひどいブッシュでルートの選定が非常に困難を感ずる。再三ルートを間ちがえてから標高二二〇〇m の三角点に着いた。ここから下は尾根が非常に急でしかも四方に小尾根を拡げていて先の見通しはつけにくいがスゴ沢の様子からやや左へルートをとったがこれが誤りで一時間余り下っても全く深いブッシュのため正確なルートがわからなかった。しかしやや左にずれすぎていることがわかったので、谷にトラバースして僅かなキャンプサイトを見付け露営。

11 月 6 日（晴後曇）　起床 6.00－出発 8.40－スゴ沢出合 11.30 渡渉昼食後出発 14.00－下の滝 14.25－トラバース終了 15.20－上の滝 16.20～17.30－上流テント地 20.00

昨日の誤りを知って今日はやや右の尾根にルートを選び尾根を下る。尾根は非常に急で、ブッシュはかなり少なく、大きな樅の木が生えている。昼頃出合着。黒部川はかなり減水しているが、川幅 40m 位慎重に渡渉する。スゴ沢は下の滝、上の滝の乗越に時間がかかり上の滝を越えるともう眞暗になる。夜 8 時迄歩いて、かなり沢の上部迄上ったがこの附近から沢が小さく分れて危険であるのでテントをはることにする。

11 月 7 日（雪後雨）　起床 6.00－出発 9.15－スゴのコル 10.00－スゴ小屋 10.50－出発 12.20－眞川支流出合 14.40－取入口事務所 16.00－千寿ケ原 19.05－富山。

朝起きると思いがけぬ雪だったが出発することに決める。出発してすぐにスゴのコルに着いた。スゴ小屋からは雨の中を一気に下る。眞川の支流は素晴しい滝が連続している。取入口から千寿ケ原迄約 16 キロを最終電車に乗るために必死に飛ばしてぎりぎり間に合った。（米林）

○

阪大山岳部は、関西学生山岳連盟の本年度当番校になった。山本、米林が岳連委員として活躍中で、笠松が補佐している。山岳部は他の運動部とちがって試合がないので、山岳部相互間の結びつきがうすくなりがちであるが、これをひきしめていくことが当面の目的である。

また、当山岳部は、大阪大学体育会において野田が常任委員、佐藤が委員となって、体育会に協力の姿勢を示している。

一九五八年度

岩登りトレーニング記録

本年度もかなり充実したトレーニングが行われた。それだけの効果もあったようだ。また本年度から、夏山のまえに強化トレーニングを行うことになった。次に概略を掲げるが、残念ながら記録が残されていない場合もあり、それらについては日時、場所のみにとゞめた。

4 月 1 日　　蓬莱峡　大島、玉井、笠松、佐藤

4 月 13 日　芦屋ロックガーデン　兼清、野田、三宅、大島、笠松、田井、玉井、横尾、黒田、前田、佐藤、大工原、中村、OB 広橋、宍戸

4 月 20 日　蓬莱峡　兼清、野田、平田、米林、田井、大工原、笠松、三宅、黒田、横尾、玉井、田村、五百蔵、保母、金子、錦田、西垣、比嘉、高橋、酒井、長谷川、服部、丸尾、OB 宍戸、広橋、西川。この日から本年度の新人達が顔をみせはじめた。

5 月 11 日　芦屋ロックガーデン－一軒茶屋－宝塚　山本、西垣、五百蔵、星野、中村、黒木、北橋、佐藤（工）、打出、服部、保母
ロックガーデンキャッスル　広橋 OB、佐藤

5 月 17・18 日　新人歓迎キャンプ（道場川原）　酒井、比嘉、中村、星野、谷垣、服部、保母、前沢、長沢、長谷川、西垣、打出、高橋、金子、五百蔵、丸尾（工）、丸尾（経）、佐藤、黒木、北橋、錦田　以上新人。兼清、山本、野田、平田、米林、平野、田端、木村、田村、佐藤、大島、村井、広瀬、田井、森村、玉井、笠松、三宅。（OB）山本（光）、広橋、西川。
篠田先生

5 月 21 日　芦屋ロックガーデン　田村、佐藤、三宅、村井、大工原、北橋、保母、中村、丸尾（工）、錦田、佐藤（工）、服部、打出、前沢、（笠松、田井は能勢口へ）

5 月 26 日　蓬莱峡　－確保の練習を行った。

6 月 15 日　御影－六甲頂上－奥池－芦屋川　強化トレーニング、一、二年部員は各々 30kg の荷をかついで喘いだ。三年部員はから身で羊飼のようについてきた。落伍者はなかったが、疲労の色が濃かった。

6 月 22 日　芦屋ロックガーデン

10 月 4 日　仁川岩場　佐藤、三宅

10 月 19 日　蓬莱峡－棚越－逆瀬川　玉井、錦田、西垣、黒木

11 月 16 日　蓬莱峡－座頭谷－宝塚　田村、大島、玉井、広瀬、佐藤、黒田、三宅、保母、佐藤（工）、北橋、五百蔵、錦田、白井、etc.

11 月 23 日　芦屋ロックガーデン　兼清以下

11 月 24・30 日　蓬莱峡　田村、玉井、錦田、大工原、保母

12 月 14 日　宝塚－六甲頂上－布引　山本、広瀬、大島、田井、佐藤、保母、村井、西垣、錦田、長谷川

3 月 2 日　　仁川岩場　野田、五百蔵、錦田、白井

共同装備在庫品　　1959.6 現在

使用可能なものだけを示す。

テント

積雪期用	ビニロン	1 号（4 人用）	
	〃	2 号（5 人用）	
	〃	3 号（5 人用）	
	ナイロン	1 号（3 人用）	
	〃	2 号（4 人用）	
	計	5 張	21 人分
夏用	12 人用		1
	6 人用		2
	5 人用		2
	計	5 張	34 人分
グランドシーツ			6 枚
ツエルト（ナイロン）			2

炊事具

バーナー　3 台（石油使用）（他に故障 2 台）

石油コンロ　1 台（1.8ℓ容量）

コッフェル	5 組
ナベ	大 3 ヶ
〃	小 2 ヶ
ヤカン	大 2 ヶ

ザイル　麻　11mm　300m（8 本）

テリレン　11mm　40m

三ツ道具

カラビナ	20
ハーケン	10
アイス・ハーケン	4
ハンマー	7
アブミ（2 段）	2

その他

エア・マットレス	5
ノコギリ	4
スコップ	2
ナタ	4

（細かいものは省略）

1958 年度　会 計 報 告

収入の部

前年度繰越金	276
部費	41, 450
合宿費残高	13, 349
体育会より	11, 000
雑収	435
テント寄附金	45, 000
	111, 510

支出の部

通信費	3, 420
合宿時費用	19, 599
消耗品費	10, 230
（ザイル・ハーケン・カラビナ）	
修繕費	23, 000
交際費	2, 410
テント購入	39, 000
ラジウス	3, 800
エアマット	2, 000
雑費	2, 700
	106, 359

残高　¥5,351

（平　田）

ビニロンテント2号・3号テント製作

寄　付　金　決　算　報　告

五八年末、年末出費多端の折にもかかわらず、先輩諸兄から多大の御援助をいただき、まことにありがとうございました。おかげで冬山、春山の計画を成功にみちびくことができました。明細並びにテント製作報告は左の通りです。

収入合計（45口）	45,000
テント2張 製作費	39,000
残高	6,000

残金は、

バーナー（ラジウス）、エアマット等の購入に当てさせていただきました。

製作報告

大要は「時報」9号に詳報されたビニロン1号と同じなので、こゝには概要だけを示すにとどめる。

ミード型、外吊り式でフレームが入っている。この点は1号と同じ。相違点は　高さ150cm（6cm増）、底面185cm×225cm（5cm×20cm増）と若干大きくなっている。

1号は4人用だが2・3号は5人用として使用できる。

◉　O　B　通　信

本年度総会並に新人歓迎キャンプ通知の際、返信の「近況」の欄に書かれたものを集録したものです。（順不同）

・連日残業になやまされています。どうしてこんなにいそがしいのでしょうか――久保三朗氏。

・上福島の公団アパートに引越して来ました。病院へ自転車通勤で五分ほどです。子供が出来たら又、郊外に移りますから住所は左記にしておきます――石沢命久氏。

・今年の四月から株式会社椿本チェン製作所工作課に勤務致しています――大村一生氏。

・足を痛めていますので最近は行っていません――鷺沢忍氏。

・今年も又理事に推せんされ、引続き“山岳”を編集することになりました。しかし会社の方も忙しく山は随分御無沙汰です――田島汎氏。

・四日から十五日まで弘前へ、殆んど山へ行く暇がありません――新谷五郎氏。

・昨今ひどい金づまりで身動きがとれません。今回の総会、キャンプも右の理由のため欠席します。尚、脚力が相当衰えているのではないかと心配するほどこの頃出不精になっております――由井浜哲也氏。

・阪大理学部大学院蛋白研溶液学部門所属――高木俊夫氏。

・あいかわらずです。篠田先生始め皆々様によろしく――三枝礼子氏。

・国立呉病院に出張中（来年夏迄）――片山徹氏。

・最近はせめて月一度程度は山に行きたいと思って何とか実行しておりますが、こちらでは日帰の適当な所がなくてついおっくうになります。六月は奥日光か谷川岳かそれとも東北の静かな山にでも行きたいと思っています。七月には是非とも合宿に参加致したいと思います――岡田博司氏。

・昭和十七年六十二才、後立山縦走を最後としてアルプス登山は不能となり、其後は六甲でしたが今はそれも止め登山とは縁が切れました――和田豊種氏。

・幸と元気で相変らず大手前病院婦人科に勤務致しております。――伊藤俊夫氏。

◉篠田部長の外遊――篠田先生は六月初旬羽田を出発され七月初旬現在デュッセルドルフに滞在しておられる。ストックホルムでの学会に出席された後、スイスアルプスへ赴かれ、さらに帰途、ヒマラヤにも足をのばされる予定。

編　集　後　記

ささやかながら、ここに第十号をおくる。不備な点を詫びるとともに、御叱正を待って後日に資したい。多くの人たちの惜しまれぬ協力、助言、ことに広橋先輩、米林、玉井両君に感謝して記す。なお赤沢岳猫の耳初登攀の記録（アタック宍戸 OB、広橋 OB、サポート田村、玉井、笠松、田井）は遅延をかさね次号にせざるを得なくなったのは残念である。

（佐藤）

大阪大学山岳会「時報」第10号
一九五九年八月　発行
発行所　大阪市北区滝安町
大阪大学学生課内
大阪大学山岳会
編集人　佐藤　俊
印刷所　大阪市西区江戸堀北通二　電停西
美研社
電話(44)五一〇〇八番